

6 『太陽まであと一步』 成井豊

○ジャンル／フアンタジー

○ストーリー／大学助教授の智は、映画監督の兄・明の妻・友子に呼ばれ、二人の家に行く。明は家で自分の映画を見ている最中に眠り始め、一週間経っても目を覚まそうとしなかった。映画のタイトルは『風の転校生』。明と智が23年前に経験した出来事を忠実に再現したものらしい。友子に頼まれ、智はその映画を見る。と、スクリーンに映し出された景色の中に、出演していないはずの明がいた。明の魂は体を抜け出して、映画の中に入り込んだのだ……。○出演者／男6＋女7＝計13
○上演時間／115分

登場人物

智 (大学助教授)
明 (智の兄・映画監督)
春菜 (智の教え子・大学4年)
友子 (明の妻・女優)
日 出 子 (アキラの母)
千 代 (アキラの祖母・パン屋社長)
アキラ (23年前の明・小学6年)
サトル (アキラの弟・小学5年)
新発田 (アキラの担任)
一 平 (日出子の弟・パン屋専務)
三 条 (パン屋従業員)
なつき (パン屋アルバイト・大学4年)

佐渡島
(助監督)

一筋の光が見える。それは、映写機の光。
二〇〇三年五月一日夜。品川にある、村上明のマンション。テーブルの上に、映写機が置いてある。明が椅子に座っている。

明

五月。木々の緑がその濃さを増し、吹きすぎる風を涼しいと感じ始める頃。僕は五月が嫌いな人に出会ったことがない。二十三年前の五月。僕は六年生になったばかりだった。背が伸びて、太陽にまた一歩近付いた気がしていた。そんな僕に、突然、突風が吹いた。吹かれた僕は、住んでいた街から、違う街へと飛ばされた。そう、僕は転校生になったのだ。僕は五月が嫌いな人に出会ったことがない。鏡の中の僕以外に。

一九八〇年五月六日昼。大泉学園にある、長岡千代の家。アキラがやってくる。リュックサックを背負い、バッグを持っている。

アキラ おばあちゃん！ おばあちゃん！

アキラの後から、日出子・サトルがやってくる。日出子はトランクとバッグを持っている。サトルはリュックサックを背負い、本を持っている。

日 出 子

ア キ ラ

日 出 子

ア キ ラ

日 出 子

ア キ ラ

日 出 子

ア キ ラ

日 出 子

ア キ ラ

日 出 子

ア キ ラ

サ ト ル

ア キ ラ

サ ト ル

日 出 子

そこへ、千代がやってくる。

アキラ、家の中を走るんじゃないの。

おばあちゃん、お店に行ったのかな。

そんなわけないわよ。玄関、開いてたし。

じゃ、トイレだ。(奥に向かつて) おばあちゃん！ 慌てて、出てこなくて

いいよ！ 全部出し終わるまで、入ってて！

いいから、荷物を降ろして、そこに座って。全く落ち着きがないんだから。

喉が乾いたな。俺、水、飲んでくる。

私は座ってなさいって言ったの。お願いだから、大人しくしてて。

でも——

言ったでしょう？ 第一印象が大切だって。おばあちゃんがウンて言ってく

れなかつたら、どうなるの？ 今夜は橋の下で寝ることになるのよ。

うわー、カッコいい！ カッコいいよな、サトル？

バカみたい。

今、なんて言った。バカって言ったのか？

バカみたい。バカなかなとは思ったけど、バカって断定はしてないよ。

生意気言うな。弟のくせに。(とサトルにつかみかかると)

(アキラの腕をつかんで) やめなさい、兄弟喧嘩は。

千代
アキラ

やかましいね。それ以上、騒いだら、外に叩き出すよ。
おばあちゃん！

日 出 子
ごめんね、母さん。いきなり押しかけてきちやって。

千 代
何しに来た。

日 出 子
イヤだ。久しぶりに会ったのに、挨拶もなし？

千 代
うちはホテルでも旅館でもない。いきなり泊まりに来られたって、浴衣も布

アキラ
団もないよ。

千 代
違うんだよ、おばあちゃん。俺たちは、ここに住むんだ。

日 出 子
住む？

千 代
家を出てきたのよ、この子たちと。だから、しばらくここに置いてほしいの。

日 出 子
旦那と何かあったのかい。

千 代
ちよつとね。

日 出 子
ちよつとで、家出はしないだろう。女でもできたのかい。

千 代
当たり前。今度の相手は、バーのママだって。

日 出 子
アキラ、あんたは黙ってて。

千 代
浮気は毎度のことだろう。バカは死ななきや治らない。あんたの旦那の女好

日 出 子
きも、死ぬまで治らないんだよ。家出なんかしたって無駄さ。

アキラ
今度という今度は許せないの。あの人、私に隠れて、マンションを借りてた

日 出 子
のよ。その女のために。

アキラ
（日出子に）母さん、そのマンションに殴り込みに行ったんだ。でも、父さ

日 出 子
んに追い返されたんだって。

アキラ
アキラ、それ以上、しゃべったら、ぶつよ。

日 出 子
俺、水、飲んでくる。

アキラが走り去る。

日 出 子

ただの浮気だったら、まだ我慢できる。でも、今度は本気なのよ。だったら、私にも覚悟がある。離婚してやるわ。

千 代

だからって、いきなり「住む」って言われてもね。

日 出 子

仕事が見つかるまでよ。見つけ次第、アパートを探す。

千 代

その年で、仕事が見つかるかい？ 女手一つで子供を育てるのは大変だよ。

日 出 子

しかも、二人も

千 代

わかってる。母さんをずっと見てきたから。

日 出 子

私には店があつたからね。でも、おまえには何もない。苦勞するのは目に見

千 代

えてるよ。

日 出 子

今までだって、散々苦勞してきたもの。あの人のことで苦勞するのはもうご

千 代

めんだけど、この子たちのためなら。

日 出 子

そこまで言うなら、仕方ないね。荷物を運びな。あんたが使ってた部屋に。

日 出 子

三人じゃ狭いだろうけど、他に部屋はないからね。

日 出 子

ありがとう、母さん。

日 出 子

あと、アキラが戻ってくる。

日 出 子

結論は出た？

アキラ

出たわ。今日から、ここが私たちの家よ。

日 出 子

学校はいつから？

アキラ

今日からって言いたいけど、転入の手続きとかしなくちゃいけないからね。

日 出 子

後で、電話して聞いてみる。

アキラ あーあ。まさか、自分が転校生になるとはなあ。
千代 ブーブー言っていないで、荷物を片づけな。
アキラ (カバンを持って) 俺の部屋はどこ？ 俺ももう十二だし、そろそろ個室が

サトル ほしいんだけど。

アキラ そんなこと言える立場かよ。

千代 何だと？

アキラ やかましい。片づけが済んだら、掃除だよ。居間、台所、玄関、廊下、庭。
おまえたち二人で全部やるんだ。今日から毎日。

千代 毎日？

アキラ それが、ここに置いてやる条件だ。働かざる者、食うべからず。

日出子 さあ、アキラ！ サトル！

日出子・アキラ・サトルが荷物を運び始める。千代は指図をするだけ。明のそばへ、友子がやってくる。

友子 また見てるの、この映画？

明 コーヒーをいれてくれないか。

友子 飲みながら、見るの？ それより、食事に行かない？ 佐渡島くん、今日ま

明 でだから、何かおいしいものを食べさせてあげましょうよ。

友子 腹が減ってないんだ。君たちだけで行ってきてくれ。

明 でも、たまには外に出ないと。

友子 今は何も食いたくないんだ！ ……すまない。大声を出して。

明 いいのよ。じゃ、今日は私の手料理でごまかすとするか。

明 友子
何？

明 この映画、おもしろいと思うか。

友子 おもしろいって言わないと、怒るでしょう？

明 怒らない。だから、正直に言ってくれ。

友子 おもしろいわよ。だって、あなた自身の映画だもの。

智・春菜・新発田・一平・三条・なつき・佐渡島がやってくる。それぞれの人が、それぞれの太陽に手を伸ばす。が、届かない。やがて、人々が去る。明はいつの間にか、椅子に座っている。友子が明に歩み寄る。

友子 ねえ、やっぱり、食事に行かない？ たまには気分転換をしないと。

明 (首をガクつと落とす)

友子 いやだ、寝ちゃったの？ 自分の映画を見ながら、居眠りしないでよ。明くん。明くん。

明 ……

友子 (奥に向かつて) 佐渡島くん！ ちょっと来てくれない？ (明に) ねえ、起きてよ。明くんてば。

そこへ、佐渡島がやってくる。

佐渡島 お呼びですか？
友子 見て。

佐渡島
友子
佐渡島

（明を見て）うわー、かわいい寝顔。
悪いけど、寝室まで運んでくれない？
わかりました。

佐渡島が明を背負う。友子とともに去る。

二〇〇三年五月八日昼。四谷にある、聖イグナチオ病院。智がやってくる。後を追って、春菜が走ってくる。

春菜

先生！（と智に駆け寄って）ひどいじゃないですか、黙って先に行くなんて。三限が延びちゃったから、走って研究室に行ったんですよ。それなのに、鍵が閉まってるんだもん。一緒に連れてってくれるって約束したくせに。

智

湯沢くん、ちよつといいかな？

春菜

何ですか？
走ってきて興奮しているのはわかるが、僕にも少し発言の機会をくれないか。どうぞ。

智

まず第一に、走るのはよくない。ここは病院なんだ。東京ドームでも国立競技場でもない。

春菜

そんなことはわかってます。でも——

智

第二に、大きな声を出すのもよくない。心臓病の患者さんがショックを受けたら、取り返しのつかないことになる。

春菜

私の声、そんなに大きいですか？
今さら小さくしても遅い。

春菜

わかりました。確かに、私は非常識な振る舞いをしました。謝ります。でも、

智

春菜

智

春菜

智

春菜

そこへ、友子がやってくる。

友子

智

友子

春菜

それは、先生が約束を破るから。

第三に、僕は約束なんかしてない。君は、僕の兄とは何の関係もない。だから、連れていくわけには行かない。僕はこの科白を十三回も言ったはずだ。

数えてたんですか？

子供の頃からのくせなんだ。自分の家から小学校までの歩数とか、回転寿司

で自分の前に来たイクラの粒々の数とか、数えても何の得にもならないものを、つい数えてしまう。

バカバカしいとは思わないんですか？

思う。でも、仕方ないんだ。遺伝だから。

誰の？

母方の祖母だよ。僕は子供の頃、祖母の家で暮らしたことがあってね。その時に気づいたんだ。祖母は朝から晩まで、常に何かを数えてた。食事の時、口の中に入れたものを噛んだ回数とか、その日に見た山口百恵のコマーシャルの数とか。祖母と比べたら、僕なんかまだまだアマチュアだ。

智くん、来てくれたの？

ええ。お久しぶりです、お姉さん。

いきなり呼びつけちゃって、ごめんなさいね。でも、どうしても会って話

したくて。そちらの方は？

はじめまして。私は村上先生の教え子で、湯沢春菜と申します。村上先生には、授業とか研究とかプライベートの悩みとか、いろいろ相談に乗っていた

友子 春菜 友子 春菜 友子 智友子 春菜 智友子 春菜 智友子 春菜 友子 智友子 春菜 友子 智友子 春菜

だいて、本当にお世話になっていきます。
（友子に）すいません。彼女がどうしても一緒に行きたいって言うんで。
湯沢さん、何年生？
四年です。来年は、大学院に進もうと思ってます。村上先生みたいな研究者になるのが私の夢なんです。
（智を見て）なるほどね。
何ですか、なるほどねって。
わかっている、わかっている。こういう時は、下手に騒がない方が、本人のためよね。フフ。
何ですか、その笑い方は。お姉さん、何か誤解してませんか？
先生、病院で大きな声を出すのはやめてください。
あ、失礼。
（友子に）それで、監督さんの具合はいかがですか？
今日でちょうど一週間になるかな。眠り始めてから。
原因はわかったんですか？
いろいろ検査してもらったんだけど、体には特に異常がないんだって。心臓の機能が多少、低下してるぐらいで。
心臓が？
ほんのちよつとよ。お医者さんも困ってるみたい。大きな手術をした後とか、大きな事故に遭った後なら、こういう例はあるらしいの。でも、明くんは映画を見てただけ。初めはただの居眠りだと思ったのに。
何を見てたんですか？
今、公開してるでしょう？『風の転校生』。

春菜

智

春菜

智

春菜

智

友子

智

友子

春菜

智

春菜

友子

五月八日夕。明のマンション。佐渡島がやってくる。

佐渡島

友子

佐渡島

友子

私、見ました。(智に) あれ、監督さんが子供の頃の話なんでしょう？
(友子に) そうなんですか？

先生、見てないんですか？

僕は、映画は見ない。宇宙人とか魔法使いとか、非現実的なものが出てくると、お尻が痒くなるんで。

でも、お兄さんの作った映画ぐらいは見なくちゃ。

兄の映画だって、似たようなものだ。最初の映画は、時間旅行の話だったかな。仕方なく見に行ったけど、痒みに耐えられなくなって、途中で出た。

でも、今度の映画は違うのよ。智くん、今日はこの後、暇？

授業はありません。家に帰って、論文の続きを書くだけで。

悪いけど、ちよつと家に寄ってくれない。あなたに見せたいものがあるよ。

見せたいものって？

湯沢くん、君は誘われてない。

でも、私も今日は暇だし。

じゃ、中に入って。明くんは眠ってるけど。

あ、お帰りなさい。

映写の準備はできてる？

ええ。今すぐ始められます。

そうそう。(智・春菜に) この人は、助監督の佐渡島くん。アキラくんが映画を撮るたびに駆けつけて、いろいろ手伝ってくれるの。

佐渡島がスイッチを押す。映画の上映が始まる。

智　お姉さん、この家は？

友子　主人公の男の子の、おばあちゃんの家よ。

智　そうじゃなくて、この家はどうかやって撮ったんです。十年以上前に取り壊さ

れて、もうこの世にはないはずなのに。

友子　もちろん、セツトよ。撮影所の中に作ったの。明くんの絵コンテ通りに。

一九八〇年五月六日昼。千代の家。アキラがやってくる。リュックサックを背負い、バッグを持っている。

アキラ　おばあちゃん！　おばあちゃん！

アキラの後から、日生子・サトルがやってくる。日生子はトランクとバッグを持っていく。サトルはリュックサックを背負い、本を持っている。

日生子　アキラ、家の中を走るんじゃないの。

アキラ　おばあちゃん、お店に行ったのかな。

日生子　そんなわけないわよ。玄関、開いてたし。

アキラ　じゃ、トイレだ。（奥に向かって）おばあちゃん！　慌てて、出てこなくて

日生子　いいよ！　全部出し終わるまで、入ってて！

アキラ　喉が乾いたな。俺、水、飲んでくる。　全く落ち着きがないんだから。

日出子　私は座ってなさいって言ったの。お願いだから、大人しくしてて。
アキラ　でも。

日出子　言ったでしょう？　第一印象が大切だって。おばあちゃんがウンて言っ

アキラ　なかつたら、どうなるの？　今夜は橋の下で寝ることになるのよ。

サトル　うわー、カッコいい。カッコいいよな、サトル。

アキラ　バカみたい。

サトル　今、なんて言った。バカって言ったのか？

アキラ　バカみたい。バカなかなとは思ったけど、バカって断定はしてないよ。

日出子　生意気言うな。弟のくせに。(とサトルにつかみかかる)

日出子　(アキラの腕をつかんで) やめなさい、兄弟喧嘩は。

そこへ、千代がやってくる。

千代　やかましいね。それ以上、騒いだら、外に叩き出すよ。

アキラ・智　おばあちゃん！

次の会話の間に、日出子・千代・アキラ・サトルの会話も同時並行で行われる。ただし、音量は小さく。

春菜　先生、上映中に大きな声を出すのはやめてください。

智　あ、失礼。でも、あれは間違はなく、おばあちゃんだ。何かって言うと、「

友子　やかましい、外に叩き出すよ」って。

友子　着てる服も同じでしょう？　明くん、自分のアルバムを衣裳さんに見せて、

智

友子

春菜
友子

春菜
智
友子

智
友子
アキラ

アキラが走り去る。

おばあちゃん役には、この服を着させてくれって。母さんもでしよう？ あの頃の母さんは、あんな服を着ていた。母さんが僕

らを連れて家出したのは、僕が小学五年の時だから――二十三年前よ。この映画は、二十三年前にあったことを、できるだけ忠実に再現しようとしたの。

じゃ、やっぱりのこの映画は実話だったんですね？

そうよ。明くんは絶対に妥協しなかった。このシーンなんか、三十回以上も撮り直したのよ。明くんのイメージ通りになるまで。

へえ。じゃ、二十三年前の先生はあんなふうだったんだ。違う。全然似てない。

さすがに、そっくりさんを連れてくるわけにはいかなくてね。だから、できるだけタイプの近い子にしたの。まあ、明くんの目にはあんなふうに見えていたのかもしれないけど。

兄さんはあんなに大きくなかった。この頃は、もう僕の方が大きかったんだ。まあ、多少の見栄も入ってるでしょう。俺、水、飲んでくる。

智

春菜
友子

智

信じられないなあ。あの時のことを映画にするなんて。

先生は何も聞いてなかったんですか？

明くんと智くんは、滅多に顔を合わせないから。一年に一度だけです。最後に会ったのは、去年の九月だ。

友子 この映画のシナリオが出来上がった頃ね。私は「智くんにも読んでもらった

ら」って言ったんだけど。

智 「あいつに読ませる必要はない」ですか？

友子 ううん。「もう読ませた。よくできてるって褒めてた」って。

春菜 嘘だったのね。

智 兄さんは昔からそうなんだ。自分勝手に、おしゃべりで、笑いのセンスが全

春菜 くなくて。僕は、兄さんのギャグで笑ったことは一度もない。

智 何もそこまで言わなくても。

春菜 あ！ 止めて！ 映画を止めてください！

智 どうしたんですか、先生？

智 （佐渡島に）いいから、早く！

佐渡島がスイッチを押す。日出子・千代・サトルの動きが止まる。

智 あれは？

日出子・千代・サトルの背後に、いつの間にか、明が立っている。

友子 そう。明くん。

智 兄さんは何の役ですか。

友子 違うの。明くんは俳優として出演したわけじゃないの。もともと、このシー

春菜 ンには、明くんなんか映ってなかったの。

春菜 そうですよね？ 私が見た時は、ここに監督さんはいませんでした。

智 友子

じゃ、どうしてここにはいるんです。落ち着いて聞いてほしいの。この映画が完成したのは二カ月前。それから、明くんは毎晩、ここでこの映画を見た。最初のうちは、私も一緒に見てたけど、明くんは映ってなかった。でも、明くんが入院して、原因はわからないかと思っ言われて、もしかして、映画の中に何かヒントがあるんじゃないかと思っ、見直してみたら、いたのよ。映画の中に。

智 春菜

何ですか、バカバカしいって。

僕をからかおうと思っても、そうは行きませんよ。兄さんがするだけのこと。はあッて、さすがに手が込んでる。わざわざ入院までして、こんなものまで作っ。しかし、ネタそのものがひどすぎる。映画の中に入るなんて。

智 春菜

じゃ、これも全部、嘘なんですか？

決まってるだろう。お姉さん、僕はこれで失礼します。(と歩き出す)

友子 佐渡島がスイッチを押す。明・日出子・千代・サトルが動き出す。そこへ、アキラが戻っってくる。

アキラ

結論は出た？

智くん、これは嘘じゃない。本当なの。

お姉さん、もう止めましょう。兄さんの計画は失敗です。でも、悪いのはお姉さんじゃない。こんなバカげたネタを考えた兄さんです。

友子

いきなりこんなものを見せられて、すぐに信じられないのはわかる。でも、

春菜

佐渡島

春菜

佐渡島

日出子

日出子・アキラ・サトルが荷物を運び始める。千代は指図をするだけ。

春菜

友子

春菜

友子

春菜

友子

春菜

友子

春菜

友子

春菜

よく考えて。私が一度でもあなたを騙そうとしたことがある？
でも、もし本当だとしたら、あれは一体何なんですか？

魂だよ、監督の。

監督は、この映画を撮るために八年も努力してきた。この映画のために生きてきたんだ。完成しても、まだこだわってる。いや、監督にとっては、まだ完成してないんだ。だから、中に入ったんだよ。
さあ、アキラ！ サトル！

でも、映画の中に魂が入るなんて。そんなことが実際にあるのかな。

お医者さんには話したけど、笑って相手にしてもらえなかった。でも、何回見ても、あの人が出てくるの。しかも、毎回違うシーンに。

何をやってるんだろう、自分の映画の中で。
あの人は夢を見てると思うってんじゃないかな。外の世界が一週間も経ってるなんて、気づいてないのよ。もしこのまま戻ってこなかったら。

でも、どうやって連れ戻すんです？

私も映画の中に入ろう。そう思って、何回も見たんだけど、どうしても入れなかった。でも、智くんなら、もしかしたら。

それは無理ですよ。先生は、映画が嫌いなんだから。
この映画は別よ。智くんにとっては、実際に体験した事件なんだから。
その理屈、ちよつと強引だと思えますよ。ねえ、先生？

智
春菜
友子
春菜
友子
佐渡島

（首をガクつと落とす）
いやだ、寝ちゃったんですか？
まさか。
え？嘘でしょう？まさか、先生まで。
どうしよう、佐渡島くん。
とりあえず、ベッドに寝かせましょう。疲れて眠っただけって可能性もあるし。

佐渡島が明を背負う。春菜・友子とともに去る。

一九八〇年五月六日昼。千代の家。アキラ・サトルがホウキで床を掃いている。そこへ、
 日出子・千代がやってくる。

千代　　ここが終わったら、台所だ。チンタラしていると、夕飯が食べられなくなるよ。

アキラ　はいはい、わかりましたよ。(小声で) 意地悪ババア。

千代　　聞こえたよ。

アキラ　掃除なんて、週に一度でいいじゃないか。そんなに汚れてないし。

日出子　余計なこと言っていないで、手を動かさなさい。私たちが帰ってくるまでに、

サトル　終わらせるのよ。

サトル　どこか、出かけるの？

日出子　ブリュンヒルデ。

アキラ　一平さんに会ったら、聞いておいて。「結婚相手は見つかった？」って。

日出子　そういうことは、あんたが直接聞きなさい。じゃ、行ってくるわね。

サトル　行っつらっしゃい。

千代　　(アキラに) 喧嘩するんじゃないよ。

日出子・千代が去る。

アキラ

サトル

クソー、俺たちは家出てきたんだぞ。それなのに、この扱いはなんだよ。よそんちのおばあちゃんだったら、きつとこう言うぞ。「おまえたちもいろいろ大変だね。ほら、これでお菓子でも買いな」って。うちのおばあちゃんが言ったら、薄気味悪いよ。

そこへ、智がやってくる。

智

やあ。

アキラ

おじさん、誰？

智

(周囲を見回して) 間違いない。ここは、おばあちゃんの家のセットだ。と

アキラ

いうことは、僕も兄さんみたいに映画の中に？

智

ちよつとちよつと。勝手に中に入るなよ。

いや、そんなことはあり得ない。映画の中に入るなんて、そんな夢みたいなこと。

アキラ

入るなって言ったのが、聞こえなかったのか？

智

そうか。ここは撮影所なんだ。寝てる間に、連れてこられたんだ。そこまでして、僕を騙したいのか。(周囲を見回して) 兄さん、いるんだろう？ 隠

隠

アキラ

うるさい！ 少しは人の話を聞けよ！ (とホウキで智を叩く)

智

あ、痛！ (とうづくまる)

アキラ

おじさん、一体誰なんだよ。

智

僕は村上智だ。

サトル

村上サトルは俺だよ。

智 知ってるよ。でも、五年生の時の僕はそんなに痩せてなかった。それに君、芝居の経験、あんまりないだろう。科白がちよっと固いよ。

サトル あんた、さっきから、何を言ってるんだよ。芝居とか科白とか、何のことだよ。

智 あくまで、芝居を続けるつもりか。まあ、その根性だけは認めてあげよう。

サトル (アキラに) 俺、警察に電話してくる。

アキラ 待てよ、サトル。(智に) おじさん、前にもここに来たことがあるの？

智 ああ。二十三年前にね。

アキラ もしかして、俺たちの親戚？

サトル そんなわけないよ。俺と同じ名前の親戚なんて、聞いたことないし。

アキラ じゃ、何だと言うんだよ。

サトル たとえば、泥棒とか。

アキラ こんな泥棒がいるわけないだろう。入ってきてから、ずっとしゃべりっぱなし。泥棒っていうより、吟遊詩人だ。

智 すばらしい。即興でここまでできるなんて、なかなかの演技力だ。(サトルに) さっきは科白が固いなんて言って、悪かったね。

サトル (アキラに) こんなヤツが親戚だなんて、思いたくない。

智 よしよし、僕も少し付き合っただけよ。(アキラに) 確かに君の言う通り、僕は君の親戚だ。今はドイツに住んでるんだけど、二十三年ぶりに日本に帰ってきてね。

アキラ それで、おばあちゃんに会いに来たわけだ。残念だけど、おばあちゃんはいないよ。ついさっき、お店に行った。

智 へえ、ブリュンヒルデのセットもあるのか。せっかくここまで連れてこられ

アキラ たんだ。ちよつと見てこよう。
おじさん、道、知ってるの？
大袈裟なこと言うなよ。どうせ隣に建ってるんだらう？（と歩き出す）
隣じゃないよ。歩いて、十分はかかるよ。（と追いかける）
サトル 待てよ、兄さん。掃除をサボる気か？（と追いかける）

智・アキラ・サトルが去る。

五月六日昼。大泉学園にある、パン屋・ブリュンヒルデ。なつきが泣きながら、走ってくる。後を追って、一平がやってくる。

一平 どうしたんだよ、なつきちゃん。今のお客さんに何か言われたのか？「この

店のパンは高い」とか。

なつき 違います。「この店、クロワッサンは置いてないの？」って。
一平 またかよ。なぜ表の看板を見ないのかな。「ドイツパンの店」って書いてあ

るのに。

なつき 私もそう言ったんです。そうしたら、あのお客さん、「パン屋なら、クロワ

一平 ッサンぐらい置いとけよ、ブス」って。
なつき なんだ、その言い草は。じゃ、そば屋がラーメンを出すか？ステーキ屋が

一平 タン塩を出すか？

なつき でも、おそば屋さんの中には、カレーを出すところもありますよね？

一平 ああ。そば屋のカレーって、結構うまいよな。でも、それがどうかした？

なつき 専務、うちの店でも、クロワッサンを作りませんか？

一平 それは無理だよ。いくらお客さんに言われたからって、うちにはうちの伝統

があるんだし。

なつき

ドイツ人は絶対にクロワッサンを食べないんですか？
絶対ってことはないんじゃないかな。フランスは隣の国だし。

一平

うちの店なら、他の店に負けない、おいしいクロワッサンが作れると思うんです。お願いします、専務。

なつき

俺は構わないけど、社長がなんて言うか。

一平
そこへ、日出子・千代がやってくる。

千代

一平、仕事中に女の子を口説くのはやめな。バカなこと言うなよ。彼女は客にひどいことを言われたんだ。だから、慰めようと思つて。

一平

本当かい、なつきちゃん？

なつき

本当です。専務は立派な方です。従業員を誘惑しようなんて、そんな邪なことを考えるわけありません。ねえ、専務？

一平

もちろんだよ。僕はあくまでも、なつきちゃんの上司として。

千代

だったら、いいんだ。なつきちゃん。悪いけど、三条くんを呼んできてくれないかい。急いで。

なつき

なつきが去る。

日出子

一平、仕事中にごめんね。

一平 珍しいな、姉さんが店に来るなんて。家を空けたりして、旦那さんに叱られないの？

千代 その心配はいらないよ。日出子は家を出てきたんだ。

一平 それはつまり、別れるってこと？

日出子 出戻りになるってことよ。悪いけど、しばらく家に厄介になる。私だけじゃ

なくて、子供たちも。

一平 そうか、とうとう見切りをつけたってわけか。やっぱり、母さんの言った通りだったな。

千代 私は三年で別れるって予想したんだ。実際は、十三年だったけどね。

一平 姉さんも、今までよく我慢してきたよ。じゃ、俺は仕事に戻るから。

千代 その前に、おまえに話があるんだよ。日出子を、ここで働かせてほしいんだ。

一平 明日から。

一平 え？

一平 え？

そこへ、三条・なつきがやってくる。

なつき

千代

三条

一平

なつき

千代

お待たせしました。

ありがたい、なつきちゃん。(三条に) 悪かったね、仕事中に呼びつけて。

いいえ。

母さん、ちょっと待ってくれよ。いきなりそんなこと言われても、困るんだ。

今はなつきちゃんだっているし。

え？

あんたは仕事に戻りな。(一平に) 日出子が仕事を見つけるまでだよ。一月

日出子

一平

千代

一平

千代

千代

千代

日出子

千代

千代

一平

か、長くても二月だろう。

(一平に) 私は他を探すって言ったのよ。でも、パン屋の娘を、他の食べ物屋で働かせるわけにはいかなかって。

でも、うちだつて、そんなに儲かっているわけじゃないし。せつかく働いてもらつても、給料が出せるかどうか。

なつきちゃんの方があるだろう。

それはつまり、なつきちゃんをクビにしろつて言うのか？
構わないだろう？ どうせアルバイトなんだから。

社長、私をクビにしないでください。
あんたは仕事に戻れつて言つたはずだよ。

私はここで働きたいんです。給料は半分、いいえ、三分の一で結構です。だから、クビにするなんて言わないでください。

なぜそこまでうちの店にこだわるんだい。
それは。

母さん、私、やつぱり、他で仕事を探すわ。
その必要はないよ。なつきちゃん、あんたの気持ちはいれしいけど、赤の他人をそんな安いお給料で働かせるわけにはいかないんだ。

でも、私はこの店が好きなんです。

だから、それはなぜだつて聞いてるんだよ。まさか、一平に惚れてるつてわけじゃないだろう？

そこへ、智がやってくる。

智 一平 三条 千代 智 なつき 千代 千代 智 一平 日出子 智 一平 智 一平

何を話してるんですか？

え？
わかってますよ。僕をどうやって騙すか、打ち合わせしてたんでしょ？

えーと、あなたは、
そういうあなたは、一平さんですね？ しかし、よくこれだけ似てる人を集めたなあ。僕の役はともかく、それ以外の役は、かなりの出来だ。

(一平に) 知り合い？
いや、初めて見る顔だ。

ここに来る途中も、驚きの連続でしたよ。通りの両側にはちゃんと家が建ってた。右側が五十七軒、左側が五十八軒。『風の転校生』って、意外と大作映画だったんですね。

すいませんけど、パンをお求めなら、店の方へどうぞ。なつきちゃん、ご案内をして。

私、働いてもいいんですね？

今日までだよ。明日からはもう来なくていい。

(泣き出す)

どうしたんですか、この人？

何でもありませんよ。三条くん、かわりにお願い。

わかりました。(智に) こちらへどうぞ。

いや、店の方はもうじつくり見ました。今度は工房を見せてください。悪いが、今、忙しいんだ。見学なら、よそへ行ってくれ。

いいんですか？ 僕がよそへ行っちゃって。

一平 智

どういう意味だ？
あなた方は、僕を騙すために集められた。せつかく芝居をしても、僕が見て
なかつたら、意味がないでしょう。

一平 智
日出子

(日出子に)こいつ、さつきから、何を言ってるのかな。
よくわからないけど、私たちが役者か何かだと思ってるみたい。
違うんですか？

一平 智

俺はパン屋だ。役者じゃない。
凄いなあ。すっかり一平さんになりきってる。でも、本当の一平さんは、も
っとガツチリしてたんですよ。パン屋は力仕事だから。かわいそうだけど、
あなたの役作りは失敗です。
何だと？(と智をつかむ)

一平 智

(振り払って)暴力はやめてくださいよ。僕は事実を言っただけなのに。
何が事実だ。俺は十九の年からパン屋一筋で生きてきたんだ。おまえみたい
な野郎に、バカにされる覚えはない。

智

今の科白はなかなかいい。一平さんの短気なところがよく出てました。でも、
もう芝居は終わりにしませんか。(周囲を見回して) 兄さん、出てこいよ。

一平 三条

三条、手伝え。
はい。(と智をつかむ)

三条 智

(振り払って)何をするんですか。

三条 智

暴れるな。怪我はさせたくない。
やめてくださいよ。僕は殺陣なんてやったことないんだ。

三条が智の体をつかむ。そこへ、明がやってくる。

明智 明智 明智 明智 明智 明智 明智 明智 明智 明智 千代 三条

三条くん、そいつを放してやってくれ。
え？

三条くん、言う通りにしな。

(三条の手を振り払って) 兄さん、これはちよつとやりすぎじゃないか？
智、おまえは誤解してる。

誤解って？

ここは撮影所じゃない。本物のブリュンヒルデなんだ。

まだそんなことを言うのか。そう言われて、僕が信じると思うか？

俺も最初は信じられなかった。夢でも見てるのかと思った。

もういい。芝居はもうたくさんだよ。

だったら、ここから出ていけ。今すぐ。

言われなくても、出ていくさ。出口はどっちなんだ。

出口はない。

兄さん、いい加減にしろよ。

おまえだって、本当はとつくに気づいてるはずだ。おばあちゃんの家からこ

こに来るまで、周りの景色を見ただろう。あれが全部セットだと思うか？

セットでなければ、何なんだ。映画の中だって言いたいのか。

違う。ここは、二十三年前の世界だ。現実なんだ。(と走り出す)

兄さん！(と追いかける)

明が走り去る。後を追って、智が走り去る。

一平
千代子
日出子
一平
千代
なつき

何だよ、あいづら。母さん、知り合いなのか？
後から来た方だけね。

（一平に）さつき、家に来たのよ。昔、この店で働いてたって言ってたけど。
俺は覚えがないなあ。母さん、それって何年前の話だい？
なつきちゃん、あんた、まだそこにいたの？
私、絶対に辞めませんから。

なつきが走り去る。後を追って、一平・三条が去る。

一九八〇年五月六日夕。千代の家。

日生子　　アキラ、サトル、早くしなさい！

そこへ、アキラ・サトルがやってくる。サトルは本を持っている。

アキラ　　あー、腹減った。途中で何か食べていこうよ。

日生子　　そんな時間ないわよ。四時までに来てくださいって言われてるんだから。
アキラ　　俺、ラーメンなら、三分で食べられるよ。家中掃除して、ペコペコなんだ。

千代　　ほう。じゃ、おまえは掃除はもう終わったって言うのかい？

アキラ　　うん。(サトルに)全部終わったよな？

サトル　　庭はまだだよ。

千代　　アキラ、嘘をついた罰だ。庭は、帰ってきてから、一人でやりな。

アキラ　　えー？

日生子　　おばあちゃんのおかげで、あんたもいい子になれそうね。(千代に)じゃ、

千代　　一時間ぐらいで戻るから。(と歩き出す)

アキラ　　さて、私はラーメンでも食べに行こうかね。

アキラ　　意地悪ババア！

日出子・アキラ・サトルが去る。

千代 確かに私は意地悪だけど、ババアじゃないよ。でも、あの子はなかなか元気だ。心配なのは、サトルだね。

そこへ、智がやってくる。

智 あの、すいません。

千代 うっ。(とうずくまる)

智 (歩み寄って) あ、大丈夫ですか？ しっかりしてください。

千代 ああ、びっくりした。あなた、どこから入ってきた。

智 裏口です。兄が来るんじゃないかって、一時間ぐらい前から見張ってたんです。

千代 お茶でも飲むかい？

智 いや、結構です。それより、少し話を聞かせてもらえませんか。

千代 なるほど。私が一人になるのを待ってたんだね。話が聞きたくて。

智 実はそうです。僕は今、非常に混乱してるんです。あなたなら、僕の質問に

千代 冷静に答えくれそうな気がして。

智 別に構わないよ。私に答えられることなら。

千代 第一の質問です。ここはどこですか。

智 私の家だよ。

千代 それはつまり、あなたはここに住んでるってことですか？

千代 智 千代 智 千代 智 千代 智 千代 智 千代 智

当たり前だろう？ 自分の家があるのに、旅館に泊まるバカがいるもんか。第二の質問です。あなたは誰ですか？

長岡千代。大正六年五月三十日生まれ。今年の正月で六十四になった。まあ、気持ちの上では二十四だけどね。

僕はあなたとよく似た女優を知っています。岡田さつきって名前なんです。岡田さつき？ いい名前だね。さぞかしキレイな女優なんだろうね。でも、そんな名前は今、初めて聞いたよ。

第三の質問です。『風の転校生』って映画は知ってますか？

知らないよ。私は映画は嫌いなんだ。だって、光を幕に映すだけだろう？ それに比べて、芝居は役者が目の前で演技してくれるからね。見るなら、芝居が一番だよ。

質問は以上です。後は、自分で考えます。

あなた、ここが撮影所だと思ってるんだろう？

ええ。現実的に考えれば、それ以外はあり得ません。でも、ここは、撮影所にしてはあまりに広すぎる。あなただって、自分が長岡千代だと思いついてるみたいだし。

お兄さんも言っていたら。ここは現実だよ。

あなたは兄を知ってるんですか？

昼間、家に来たんだよ。「十年前にブリュンヒルデでアルバイトをしてた、佐渡島です」って。そんな名前には全く覚えがなかった。でも、初めて会ったって気もしなくてね。まるで、幼なじみが訪ねてきたような。

兄はそんなに老けてませんよ。

お兄さんは私に会いに来たって言っていたけど、あれは嘘だね。私を無視して、

日出子にばかり話しかけてた。間違いない。お兄さんは、日出子に会いに来たんだ。
智 母さんは、日出子さんは、今、どこですか？
千代 近所の小学校だよ。アキラとサトルの、転入の手続きに行った。
智 失礼しました。

智が去る。反対側へ、千代が去る。
二〇〇三年五月八日夕。明のマンション。春菜・佐渡島がやってくる。

春菜 どうですか？ 先生は中にいますか？
佐渡島 このシーンにはいないみたいですね。でも、しばらく見てみましょう。
春菜 ここはどこなんですか？
佐渡島 職員室です。アキラとサトルが転校してくる小学校の。

一九八〇年五月六日夕。大泉学園にある、小学校。日出子・アキラ・サトルがやってくる。サトルは本を持っている。反対側から、信濃川がやってくる。

信濃川 すいませんね、お待たせしちゃって。新発田先生、今、来ますから。
春菜 あれ？ あの人は？
佐渡島 奥さんですよ。あなた、この映画は見たんじゃないんですか？
春菜 見たけど、気がつかなかった。だって、この役、出番が少ないでしょう？
佐渡島 二回だけです。奥さんは特別出演ですから。

そこへ、新発田がやってくる。

新発田 遅くなつて、すいません。六年三組の担任の、新発田です。

日生子 新発田くん？

新発田 久しぶりだね、長岡さん。

日生子 信じられない。新発田くんが、アキラの担任になるの？

新発田 僕だって、信じられなかったよ。でも、アキラとサトルの兄弟なんて、滅多にいるもんじゃないから。へえ、あの二人がこんなに大きくなったのか。

信濃川 新発田先生、前からお知り合いだったんですか？

新発田 ええ。彼女とは、高校の時の同級生なんです。その頃は、長岡って名字だったんですが。

日生子 (信濃川に) 駅前にある、ブリュンヒルデってパン屋の娘です。

信濃川 ああ、あのパン屋。

新発田 信濃川先生、よく行くんですか？

信濃川 一度だけ行ったけど、あそこはクロワッサンを置いてないから。

日生子 すいません。うちはドイツパン専門店なんです。

新発田 僕はちよくちよく行つてるよ。一平くんは、サッカー部の後輩だし。

日生子 明日から、私も店を手伝うことになったのよ。

新発田 へえ。でも、どうして。この近所に家でも買ったの？

日生子 違うのよ。ちよつと事情があつて、実家に戻つたの。

新発田 どうして。

信濃川 新発田先生、そういうことはあまり突っ込んで聞かない方が。

新発田 でも、僕はアキラくんの担任になるわけですから、家庭の事情はきちんと把

信濃川

新発田

アキラ

日生子

アキラ

サトル

アキラ

サトル

アキラ

新発田

日生子

信濃川

新発田

アキラ

サトル

アキラ

日生子

アキラ

握しておかないと。
聞かなくても、考えれば、わかるでしょう。

いいえ。僕にも何も。
家出したんだよ、俺たち。

アキラ。

父さんが浮気して、母さんが怒って、俺たちを連れて、家を出たんだ。母さんは離婚するって言ってる。だから、俺たち、もうすぐ長岡って名字になるんだ。

また余計な口出しをして。

余計じゃない。母さんが答えにくそうだったから、かわりに答えたんだ。

だからって、父さんが浮気したことまで言うことないだろう？ 恥ずかしい。仕方ないだろう？ 事実なんだから。

本当かい、長岡さん？

恥ずかしいけど、本当。離婚がいつになるかはわからないけど。

たとえ離婚したとしても、学校では村上のままでもいいんじゃないですか？

(日生子に) そうしよう、そうしよう。(アキラ・サトルに) 君たちだって、

いきなり長岡って呼ばれても、返事がしにくいだろう。

僕は別に平気です。名字が変わっても。

兄さんは黙ってるよ。

村上は、父さんの名字なんだぞ。俺は今す

ぐにでも長岡になりたいね。

そういうわけには行かないのよ。あなたの名字は、まだ村上なんだから。

どうなんだよ、サトル。

サトル 僕は村上のままがいい。だって、僕は村上サトルなんだから。

そこへ、智がやってくる。

智 あ、いた、いた。(と日出子に歩み寄って) お話し中のところ、すいません。

日出子 兄はここに来ませんでしたか？

いいえ。

春菜 あ、先生だ！ やっぱり、映画の中に入ったんだ。

佐渡島 驚いたな。本当に入れたんだ。僕、奥さんを呼んできます。

佐渡島が去る。

新発田 長岡さん、この人は？

アキラ その人は、うちの親戚だよ。今はドイツに住んでて、二十三年ぶりに帰って

きたんだって。

日出子 どうしてあんたがそんなこと知ってるのよ。

アキラ さっき、家に来たんだ。母さんたちがお店に行ってる時。

智 (信濃川に) ああ、あなたは？

信濃川 五年一組の担任の、信濃川です。

智 驚いたな。お姉さんもこの映画に出てたんですか。しかし、どこからどう見

ても、信濃川先生だ。役作りはカンペキです。

新発田 役作りって？

智 そういふあなたは、新発田先生ですね？ うーん。六十五点。

新発田
日出子
智

何が六十五点なんですか？ 僕の見た目ですか？
（智に）あなた、この人たちも役者だと思ってるの？
いや、この小学校を見て、ちよつと自信がなくなってきました。この建物は鉄筋三階建てだ。いくら大作映画だって、そこまで予算があるとは思えない。

校庭には、
子供が一二三人もいたし。

私たちは役者じゃない。私は村上日出子なの。

智

しかし、そんなことはあり得ないんだ。じゃ、僕は兄を探してきます。

新発田

ちよつとちよつと。部外者が勝手に歩き回らないでくださいよ。

智

まあ、いいじゃないですか。僕はこの小学校の出身者なんだし。

新発田

そうなんですか？

智

正確に言うと、一カ月しかいませんでしたけどね。

智が去る。

信濃川

新発田先生、放っておいていいんですか？

新発田

でも、うちの出身者だって言ってたし。

信濃川

あの人は何もしなくても、子供たちが驚くでしょう。変なおじさんが入ってきたって。

新発田

そう言えば、そうだ。長岡さん、ちよつと待っててね。

新発田が走り去る。反対側へ、日出子・信濃川が去る。

二〇〇三年五月八日夕。明のマンション。佐渡島がやってくる。

佐渡島 湯沢さん、奥さんは電話中でした。すぐに終わると思いますけど。

春菜 もう手遅れです。先生、いなくなっちゃいました。

佐渡島 そうですか。でも、またすぐに出てくるでしょう。

春菜 次は何のシーンでしたっけ？

佐渡島 千代の家に、新発田が来るシーンです。

一九八〇年五月六日夜。千代の家。

アキラ おばあちゃん、庭の掃除、終わったよ。

そこへ、千代がやってくる。

千代 ずいぶん早かったじゃないか。

アキラ 一生懸命やったからね。まあ、俺もやる時はやるってことだよ。

千代 サトル、アキラは嘘をついてないだろうね？

サトル 隅から隅まで、ちゃんと掃いてたよ。掃きながら、意地悪ババアって七十八

アキラ 回言つてたけど。
千代 数えるな、バカ。
アキラ まあ、いいだろう。もうすぐ夕飯だから、二人で相撲でもしてな。
アキラ あれ？ 誰か来たみたいだ。俺、見てくる。

アキラが走り去る。サトルが本を読み始める。

千代 何を読んでもらんだい。
サトル 『坂の上の雲』。
千代 司馬遼太郎か。子供のくせに、ずんぶん難しい本を読むんだね。
サトル 仕方ないんだ。父さんの本棚には、この人の本しかないから。

そこへ、アキラが戻ってくる。本を持っている。後から、新発田がついてくる。

アキラ おばあちゃん、新発田先生が来たよ。今度、俺の担任になる先生。
新発田 (千代に) すいません。すぐに帰るつもりだったんですが、アキラくんは無
アキラ 理やり引っ張り込まれちゃって。
新発田 (千代に) 先生は、前から母さんのことを知ってたんだ。高校の時、同級生
アキラ だったんだって。恋人だったかどうかは、まだ不明。
新発田 (千代に) ただの同級生ですよ。じゃ、僕はこれで失礼します。
アキラ 待ってよ。今、母さんと呼んでくるから。

アキラが走り去る。

千代 (新発田に) 初めまして、アキラの祖母です。アキラをよろしくお願いしま

す。

新発田 いや、こちらこそお願いします。

千代 それで、この家庭訪問の目的は？ アキラですか、日出子ですか？

新発田 もろちん、アキラくんですよ。子供の冗談を真に受けなくてください。

そこへ、アキラが戻ってくる。後から、日出子がやってくる。

アキラ 呼んできたよ。

日出子 どうしたの、新発田くん？

新発田 教科書を持ってきたんだ。一冊だけ、渡し忘れたから。

アキラ (本を見て) こんなもの、明日渡してくればよかったのに。

新発田 それじゃ、予習ができないだろう？ 明日は、二十四ページからだ。ちゃん

と読んでおけよ。

アキラ でも、これ、音楽だよ。音楽なんて、予習する必要、あるの？

新発田 当たり前じゃないか。歌詞の中で意味のわからない言葉があったら、辞書で

調べるんだ。

日出子 新発田くん、全然変わってないね。

新発田 そうかな。

日出子 (アキラに) この人はね、クラス一のまじめ人間だったの。予習復習をして

こなかった子は、みんなこの人に聞きに行ったのよ。

アキラ 母さんも？

日 出 子
まあね。

新 発 田
転校第一日目って、緊張するじゃないか。だから、ちゃんと準備しておいた

方がいいと思つて。

日 出 子
ありがとう。いろいろ気を遣つてくれて。

新 発 田
じゃ、僕はこれで。

ア キ ラ
先生、ご飯を食べていけば？ いいでしょう、おばあちゃん？

新 発 田
いや、僕は教科書を持ってきただけだから。

千 代
食事の時間を狙つてね。

新 発 田
違いますよ。テストの採点が終わったのが、たまたまこの時間だっただけで。

ア キ ラ
(千代に) 母さんの高校時代の話が聞きたいんだ。ねえ、いいでしょう？

千 代
ここでご馳走しておけば、おまえが何か悪さをした時、大目に見てもらえる

ア キ ラ
かもしれないね。よし、いいだろう。

ア キ ラ
やったー！

そ こ へ、
智がやつてくる。

智
あの、よかつたら、僕にもご馳走してもらえませんか？

サ ト ル
あ、また来た。

春 菜
あ、また出てきた。佐渡島さん、奥さんはまだですか？

佐 渡 島
ちよつと見えます。

そ こ へ、
友子がやつてくる。

友子
春菜
千代
智
アキラ
アキラ
日生子
智
アキラ
アキラ
日生子
智
アキラ
日生子
智
アキラ
智
千代
智

ごめんなさいね、長電話になっちゃって。あ、あれは智くんね？
二回目の登場です。かなり、周りに馴染んできてます。

(智に) 食事がしたかったら、この先の十字路に、焼肉屋があるよ。
悔しいけど、僕にはお金がないんです。

わかった。財布を落としたんだろう？

そうじゃない。(と財布を出して) さっき、スーパーで、菓子パンを買おう
と思つて、これを出したら、(と千円札を出して) 「ふざけるな」 っつて。

(千円札を取つて) 誰だ、この人？

夏目漱石よ。ほら、ここに書いてあるでしょう？

新札が発行されたのは、僕が中学三年の時。つまり、この映画の中では、た
だのおもちゃになるわけだ。

え？ これ、おもちゃじゃないの？

子供のくせに、上手な芝居しやがつて。でも、子役は大成しないだつてさ。
残念だったな。

あなた、まだそんなこと言ってるの？

僕は絶対に認めませんよ。あなたが村上日出子だなんて。

ねえねえ、これ、記念にもらつてもいい？

ダメだ。(と千円札を取つて) お札を除いたら、僕の所持金は三五円。これ
じゃ、食事もできないし、ホテルにも泊まれない。

それは暗に、家に泊めてくれつて言ってるのかい？

一晩だけで結構です。明日になったら、兄を捕まえて、帰る方法を聞き出し
ますから。

そこへ、一平がやってくる。

一平 おまえ、ここで何をしてるんだ。

サトル お帰り、一平さん。

一平 母さん、こいつはここへ何しに来たんだ。

千代 家に泊めてくれてさ。

一平 まさか、泊めてやるつもりじゃないだろうな？ こんな赤の他人を。

日生子 違うのよ、一平。この人は、うちの親戚らしいの。(智に) そうでしょう？

一平 しかし、こいつは佐渡島ってヤツの弟だろう。

アキラ 佐渡島？ でも、この人の名前は村上智だよ。

日生子 嘘。サトルと同じ名前なの？

一平 何が何だか、さっぱりわからないな。(智に) 要するに、おまえは誰なんだ。智

千代 えーと、僕はですねー

智 あんた、本当に、村上智って名前なのかい？

千代 ええ。

千代 だったら、死んだ父ちゃんから聞いたことがあるよ。そういう名前の親戚が

一平 いるって。

一平 俺は聞いたことないぞ。

千代 親戚が困ってるのに、助けないわけにはいかないだろう。さあ、ご飯にしよう。(新発田に)

新発田 俺がここにいること、覚えていてくださったんですね。

次の会話の間に、智・日生子・千代・アキラ・サトル・新発田・一平が去る。

春菜
友子

『風の転校生』って、こんな話でしたっけ？
全然違うわ。今のシーンは、日出子と新発田が高校時代の思い出を語り合うはずだった。それを見て、アキラは気づくのよ。新発田は日出子が好きだった。

春菜
友子

アキラは気づきましたかね？
気づかなかったと思う。智くんが出てきて、全然違う話題になっちゃったから。

春菜
佐渡島

あ、場面が変わった。

春菜

これは、お風呂のシーンですね。兄弟喧嘩をして、今度は風呂掃除をやらされるんです。
うわー、かわいいお尻。

五月六日夜。大泉学園にある、新発田のアパート。智・新発田がやってくる。次の会話の間に、友子が去る。

智

あの、よかったら、シャワーを貸してもらえませんか。いろいろ走り回った

新発田

ら、汗をかいたら、シャワーを貸してもらえませんか。いろいろ走り回った

智

どうぞ。風呂場はそっちです。

新発田

あの、タオルは？
洗面所の棚に入っています。どれでも、好きなものを使ってください。

智

すいません。いきなり押しかけてきて、わがままを言って。

新発田

気にしないでください。困っている人を放っておくわけにはいかないし、長

智

新発田

新発田

智

新発田

智

新発田

智

新発田

智

新発田

智

新発田

智

新発田

智

新発田

智

新発田

智

新発田

岡さんのお母さんに「頼む」って言われちゃったから。さつきは六十五点なんて言って、すみませんでした。あなたは正真正銘、新発田先生です。百点満点です。

その点数には、何の意味があるんですか？

まあ、いいじゃないですか。じゃ、僕はシャワーを浴びてきます。

あなた、長岡さんとはどういう関係なんですか。

千代さんが言ってたでしょう。親戚ですよ。

ただの親戚が、なぜ転入の手続きに来たんですか。

それは兄を探すためです。兄は小学校にいるって思ったものですから。

本当にそれだけですか？

あなた、もしかして、嫉妬してるんですか？ 僕が日出子さんとただならぬ

関係なんじゃないかって。

いや、僕はただ、担任として。

ごまかしても、ダメですよ。あなたは、高校時代から、日出子さんに片思い

している。最初に好きになったのが十六の時だから、なんと、二十年も。

バカバカしい。二十年も片思いを続ける男がいるもんですか。

ここにいますよ。一回目の告白は、高校の卒業式の日。必死の覚悟で「好き

です」って言ったのに、「嘘でしょう？」って笑われた。

適当なことを言わないでください。何も知らないくせに。

二回目の告白は、日出子さんが婚約したって聞いた、次の日。こんなに大き

な花束を買っていった、「考え直してくれ」って頼んだのに、「これ、婚約

指輪」って自慢された。

なぜそこまで知ってるんだ。

智
新発田

智

智
新発田

智
新発田
智
新発田
智
新発田

三回目の告白は。

待て。僕が告白したのは、二回だけだ。二回目で、彼女のことは諦めた。だから、見合いをして、結婚したんだ。

でも、すぐに離婚した。あなたは、日出子さんのことが忘れられなかったんだ。だから、日出子さんが離婚するって聞いて、「今度こそは」と思ったんだ。

そんなこと、思っていない。

いいえ、思いました。しかし、あなたは気が小さいから、なかなか日出子さんにアタックできない。そんなあなたを助けてくれたのが、サトルです。サトルのおかげで、あなたは日出子さんを映画に誘うことに成功する。三回目の告白は、映画の帰り道。僕の記憶に間違いなければ、五月の最後の日曜日です。

君はなぜそんなことを知ってるんだ。

それは、僕が筋に経験したことだからです。

君は、未来人なのか？

違いますよ。僕は未来から来たんじゃない。この世界の外から来たんです。

この世界の外？

その顔は、「いきなり何を言い出すんだ」って顔ですね？ あなたの気持ちにはよくわかります。僕にもずっと信じられなかった。でも、さっきみんなです。酔豚のくせに、鶏肉を使うのが特徴だね。あの味は間違いなく、母さんの味だった。それに気づいたら、何だか意地を張るのがバカバカしくなっちゃって。間違いない。ここは、映画の中なんだ。

新発田
智

映画の中？
いきなり驚かせて、すみません。僕の講義はこれで終わりです。質問は、シヤワーの後に受け付けます。じゃ。

智が去る。反対側へ、新発田が去る。

二〇〇三年五月八日夕。明のマンション。

春菜

かわいそう。二人とも、裸で掃除してる。

佐渡島

このシーンは苦労しました。アキラとサトルが風邪を引かないように、風呂場の周りに、ストーブを並べて。おかげで、スタッフは汗びっしょりです。

春菜

大変なんです、撮影って。

佐渡島

だから、楽しいんですけどね。あ、次のシーンに行きましたよ。

一九八〇年五月七日朝。小学校。千代・アキラ・サトルがやってくる。反対側から、信濃川がやってくる。

信濃川

おはようございます。今日は、おばあちゃんが付き添いですか？

春菜

あ、また奥さんが出てきた。(周囲を見回して) あれ？ 奥さんは？

佐渡島

さっきまで、ここにいたんですけどね。また電話かな。

春菜

どうして自分の出てるシーンになると、いなくなるんだらう。恥ずかしいの

佐渡島

かな。いや、ただの偶然でしょう。

そこへ、智・新発田がやってくる。

智

佐渡島

春菜

(千代に)おはようございます。昨夜はご馳走さまでした。あ、監督の弟さんも出てきましたよ。何だか、すっかり馴染んじやってますね。他の登場人物と、全然違和感がない。

信濃川

新発田

信濃川

新発田

智

アキラ

智

アキラ

千代

智

アキラ

千代

智

信濃川

信濃川

新発田先生、その人は、あなたが連れてきたんですか？
ええ。この子たちのお母さんに会いたいわって言うんです。
その人は昨日、何をしました？ 「兄さん！ 兄さん！」て叫びながら、学校中を走り回って、子供たちを恐怖のどん底に叩き込んだんですよ。
今日はもうしらないと思います。(智に) しませんよね？
ええ、兄さえ見つかれば。今日は、日出子さんは留守番ですか？
店に行つたよ。今朝から仕事だからね。
そう言えば、そうだった。転校第一日目で緊張してるのに、一緒に来てくれなかつた。おばあちゃんも来てくれて、ちつともうれしくなかつた。
おじさん、俺の気持ちがよくわかるね。
アキラ、今度はどこの掃除がしたい？
でも、兄さん、よく覚えてたな。いや、この映画は、兄さんが作ったんだ。母さんが学校に来ないことは、前から知ってたんだ。しまった。(と走り出す)
ちよつと、あなた。どこへ行くんですか。

智が走り去る。

信濃川 新発田先生、後を追いかけてください。
新発田 でも、あの人はパン屋に行っただと思えますよ。
信濃川 何がパン屋ですか。さあ、早く！

新発田が走り去る。反対側へ、千代・アキラ・サトル・信濃川が去る。

春菜 佐渡島さん、新発田って、この映画ではかなり重要な役ですよ？
佐渡島 ええ。主役はアキラですけど、新発田と日出子のラブストーリーでもあるわけですから。

春菜 でも、今のシーン、新発田はほとんど黙ってましたよ。先生ばかりしゃべって。
佐渡島 主役の座を狙ってるんでしょうか。

五月七日朝。ブリュンヒルデ。日出子・一平がやってくる。

一平 最後に店に立ったのはいつだっけ。

日出子 大学生の時だから、もう十五年近く前。

一平 そうか。じゃ、ドイツ語なんか、一つも覚えてないだろう。(ドイツ語で)
いらっしやいませ。ありがとうございます。

日出子 日本語じゃダメ？
一平 ダメに決まってるだろう。これは、うちの店の伝統なんだから。

そこへ、三条がやってくる。

三条 (ドイツ語で) おはようございます。

一平 (ドイツ語で) おはよう。(日本語で) ちょっと待っていてくれ。今、着替えてくるから。

三条 その前に、話があります。なつきが来てるんです。

一平 え? やっぱり?

三条 俺より先に来て、掃除をしました。店の中は、見違えるほど、キレイになりました。

一平 日生子 まいったな。どんなにキレイにしても、給料は払えないのに。

一平 私、今日は帰ろうか?

一平 でも、母さんが知ったら、なんて言うか。

そこへ、なつきがやってくる。

なつき (ドイツ語で) おはようございます。

一平 (ドイツ語で) おはよう。(日本語で) なつきちゃん、社長が昨日、なんて言ったか、覚えてる?

なつき ええ。でも、私はここで働きたいんです。

一平 俺だって、君にはずっとうちにてほしいさ。しかし、これは社長が決めたことなんだ。

なつき でも、この店を実際に切り盛りしてるのは、専務じゃないですか。専務がクビにしないって言えば、それで済むはずですよ。

一平 それはそうかもしれないけど。
三条 専務、差し出がましいかもしれないけど。
一平 ああ、どうぞ。
三条

なつき いいか、なつき。日出子さんには生活がかかっているんだ。二人の子供を食わ
三条 それじゃ、三条さんも、私に辞めろって言うんですか。
なつき おまえは働かなくても、食っていける。ここで稼いだ金だって、海外旅行の
三条 資金にするつもりなんだろう。いきなりクビになっても、何も困ることはな
い。

なつき 困ります。私はこの店が好きなんだから。
日出子 わかった。あなたはここで働いて。私は別の所を探すから。
一平 姉さん、何を言ひ出すんだよ。

一平 最初はそのつもりだったのよ。でも、子供ができてからずっと家にいたんで、
外で働くのが怖くね。それで、つい、母さんに甘えちゃったの。でも、それ
じゃいけないんだ。私も、なつきちゃんみたいに、死に物狂いでやらなくち
や。だって、二人の子供を食わしていかなくちゃいけないんだから。
姉さん。

一平 そこへ、智がやってくる。

智 よかった。皆さん、お揃いですね。
一平 今日は何の用だ。
智 昨日と同じです。兄はここに来てませんか。

一平 一智 一智 一平

見ればわかるだろう。俺たちしかいない。
念のために、工房を見せてもらえますか。
冗談じゃない。パン屋は朝が一番忙しいんだ。
まあ、そう言わないで。ほんの一瞬ですから。（と歩き出す）
おい、待て。

そこへ、明がやってくる。

智明

智、いい加減にしろ。
それはこっちの科白だよ。兄さんを捕まえるために、どれだけ走り回ったと思ってるんだ。

おまえのせいで、この映画はぶち壊した。なぜすぐに出ていかなかった。僕だってそうしたかったよ。でも、その方法がわからなかった。

簡単だ。帰ろう。そう決意すれば、すぐに帰れる。

兄さんも一緒に帰ろう。お姉さんが心配してる。

俺はもう少しここにいる。まだやりたいことがあるんだ。

知ってるよ。その人と話したいんだろう。

そうじゃない。

兄さんが母さんを思う気持ちはわかる。でも、その人は母さんじゃない。坂

口理恵って女優なんだ。

そんなことはわかってる。

だったら、なぜその人につきまとうんだ。

俺はつきまとってなんかいない。（背中を向けて、歩き出す）

明智明 智明智明智明智明 智明

智

明

一平

智

一平

待てよ。

これは俺の映画だ。俺が何をしようとおまえには関係ない。

何が、俺の映画だ。僕に黙って、勝手にこんなもの、作りやがって。(と明をつかむ)

おい、乱暴はやめろよ。(と智をつかむ)

うるさい！(と一平の手を振り払って、明に)母さんは八年も前に死んだんだ。もうこの世にはいないんだ。いい年をした大人が、いつまで引きずれば、気が済むんだ。(と明をつかむ)

やめろって言ったのが、聞こえないのか？

一平が智をつかむ。智が一平を突き飛ばす。一平が智を殴る。智が避ける。三条が智をつかみ、殴る。智が倒れる。一平が智をつかむ。

春菜・日出子 やめて！

一平 え？(と日出子とは別の方向を見る)

明 一平さん、それぐらいで許してやってください。

一平 (智に)これ以上、痛い思いをしたくなかったら、出ていけ。

智 兄さん、一緒に帰ろう。

一平 三条、手伝え。

三条 はい。(と智をつかむ)

一平・三条が智を引きずって、去る。

明 日出子

（日出子に）すみませんでした。お騒がせして。
あの人、あなたの弟さんじゃないんですか？
ええ。でも、いいんです。僕らは子供の頃から、

ずっとこの調子なんです。

明・日出子・なつきが去る。

二〇〇三年五月八日夕。明のマンション。

7

春菜 ひどいじゃないですか、二人がかりで殴るなんて。先生は何もしてないのに。

佐渡島 でも、今のシーンは目茶苦茶になりましたよね？

春菜 それは、監督さんを連れ戻そうとして、仕方なく。

佐渡島 もちろんそうです。でも、弟さんが来たせいで、一平の科白は途中で終わっ

てしまった。あの後、一平は、姉を思う弟の気持ちを、切々と語るはずだっ

たんです。一平にとつては、最大の見せ場だったんです。

春菜 それで、あんなに怒ったんだ。気持ちにはわかるけど、やっぱり許せない。

そこへ、友子がやってくる。

友子 ごめんなさいね、おトイレから出たら、宅配便が来ちゃって。どう？ 智く

佐渡島 んは出てきた？

友子 ええ。後から、監督も。

佐渡島 え？ 明くんも？ まだいる？

友子 いや、もう次のシーンに行っちゃいました。ここは、六年三組の教室ですね。

佐渡島 アキラの自己紹介のシーンです。

そこへ、智がやってくる。

智

湯沢くん、帰ろう。

友子

智くん、目が覚めたの？

春菜

先生、怪我はありませんか？

智

見たのか？ 僕が殴られるところ。

春菜

ええ。でも、安心してください。たとえ先生が喧嘩が弱くても、私の気持ちは変わりません。

智

君の気持ちはどうでもいいんだ。佐渡島くん、僕は本当にあそこに映ってたのか？

佐渡島

ええ。あなたは映画の中にいました。

智

やっぱり夢じゃなかったのか。道理で痛いはずだ。

春菜

そうか。その痛みで、目が覚めたんですね？

智

いや、違う。もうイヤだ。兄さんがどうなるかと、知るもんか。僕は帰る。

佐渡島

そう思っつて、目を開いたら、ベッドの中にいたんだ。

友子

監督が言っつてた通りだ。

智

明くんはなんて言っつてたの？

友子

お姉さん、見てなかったんですか？

智

お姉さん、ちよつと席を外してたのよ。

友子

お姉さん。僕はやれるだけのことをやりました。しかし、兄には帰るつもりがない。本人が帰ろうつて決意しない限り、目覚めることはないんです。

友子

理由は言っつてた？ なぜ映画の中に入ったか。

智 それについては何も。でも、僕にはわかりました。兄は、母に会いに行ったんです。

友子

お母さんに？

智 僕らの母は五十で亡くなりました。僕らを育てるために苦勞して、苦勞して、それなのに、五十までしか生きられなかつたんです。

春菜

それじゃ、監督さんは最初からそのつもりで、この映画を？

智

わからない。しかし、これだけは言える。僕らの母はあの人じゃない。そんなこともわからない人間に、何を言っても無駄なんだ。(と歩き出す)

春菜

先生！(友子・佐渡島に)お邪魔しました。

智が去る。後を追って、春菜が去る。

佐渡島

(友子に)いいんですか？ 弟さん、帰っちゃいますよ。

友子

仕方ないわ。智くんは、できるだけのことをしてくれたんだから。

佐渡島

でも、監督はまだ映画の中です。監督を助けられるのは、あの人だけなんですよ。

佐渡島が走り去る。

一九八〇年五月七日夜。千代の家。サトルが本を読んでいる。そこへ、一平がやってくる。

一平
サトル

何だよ、また本を読んでいるのか？
お帰り、一平さん。

一平 サトル ただいま。どうだった、転校初日は。友達はできたか？
一平 サトル 学校は、勉強をする所だよ。友達を作る所じゃない。
一平 サトル そうなのか？ 俺は友達に会うために、学校に行ってたぞ。
一平 サトル だから、こうなっちゃったんだ。
一平 サトル おまえ、パン屋をバカにするのか？
一平 サトル してないよ。一平さんはドイツに一年も修行に行った。だから、ドイツ語が
一平 サトル ペラペラじゃないか。僕は一平さんを尊敬してるんだ。
一平 サトル (ドイツ語で) ありがとう。
サトル いいなあ。俺もドイツに行きたいなあ。一人で。

そこへ、アキラ・明がやってくる。

アキラ あれ？ 一平さん、帰ってたの？
明 (一平に) お邪魔してます。
一平 今日はあんたか。まさか、あんたも飯を食いに来たんじゃないだろうな？
明 違いますよ。弟がいろいろご迷惑をかけたんで、そのお詫びに。
一平 へえ。弟と違って、礼儀正しいんだな。そうそう。あんた、佐渡島って名前
明 だろう？ でも、弟の名前は村上智。なんで名字が違うんだ？
一平 聞きたいですか？ 我が家の呪われた過去を。
アキラ いや、いい。今ので、何となくわかった。
一平 (奥に向かつて) おばあちゃん、トイレの掃除、終わったよ。

そこへ、千代がやってくる。

千代
明 アキラ
千代 アキラ
一平
千代 一平
一平
一平
千代
千代
一平
一平
一平
一平

佐渡島さん、アキラはまじめにやってみましたか。

ええ。しゃべってばかりで、なかなか進みませんでしたか。

嘘だ。おしゃべりしたのは、おじさんの方じゃないか。

アキラ、明日、もう一度、やり直した。今度は一人でやつてもらおうよ。

えー！

母さん、姉さんから聞いた？ 今朝のこと。

ああ。一度、家に帰ってきたんでね。

俺は反対したんだよ。でも、姉さんは、一度言い出したら、聞かないから。

それを説得するのが、専務の仕事だろう。

もちろんだよ。でも、従業員の気持ちを無視するわけにもいかないじゃないか。

か。なつきちゃんだって、どうしても辞めたくないって言うし。

うちの店が好きだって言ってたね。一体どこが気に入ったのか。

それは、俺がいるからじゃないかな。

え？

だから、なつきちゃんは俺のことが好きなんだよ。

それはないだろう。

いや、間違いないよ。なつきちゃんには仕事熱心な子だけど、よく失敗するだ

ろう？ 三条はああいう性格だから、厳しく叱る。当然、なつきちゃん泣

く。それを慰めたのが、俺なんだ。最近、悩み事なんかも相談されるよ

うになつてさ。なんか、すっかり頼りにされちゃってるんだよ。

それは単に、上司としてじゃないですか？

あんたが言うなよ。部外者のくせに。

千代
一平
で、おまえはどうなんだい。なつきちゃんのは好きなのかい。
まあ、俺も憎からず思ってるよ。いや、照れるなあ。

そこへ、日 outgoing がやってくる。

日 outgoing
ごめんね、遅くなっちゃって。友達の家に行ったら、つい話し込んでちゃって。

サトル
お帰り、母さん。

日 outgoing
ただいま、サトル。急いで、食事の支度をするからね。あれ？

明
お邪魔してます。

日 outgoing
今日はあなた？ まさか、あなたもご飯を食べにきたの？

アキラ
違うよ。「弟がいろいろご迷惑をおかけしました」って、ケーキを持ってきてくれたんだ。

明
（日 outgoing に）信じられないかもしれないかもしれませんが、弟は大学の助教授なんですよ。

専門はドイツ史で、かなり優秀な研究者なんです。ところが、最近、教え子と恋愛事件を起こしましてね。それ以来、精神状態が不安定になって、現実と空想の区別がなくなりました。

それで、役者とか映画とか言っていたのか。

でも、もう安心してください。弟はドイツに帰りました。ここへは二度と来ないと思います。

（日 outgoing に）これで全員揃ったんだから、ケーキを食べようよ。

ケーキは食事の後よ。それまで、我慢しなさい。（と歩き出す）

日 outgoing
日 outgoing、仕事は見つかったかい？

ダメだった。何軒か行ってみただけど、なかなか条件が合わなくて。

日 outgoing
千代
アキラ

千代

日出子

千代

日出子

千代

明

一平

明

一平

千代

明

一平

千代

一平

日出子

一平

日出子

千代

本当かい？ 「うちはおもつと若い子に来てほしいんだ」とか何とか言われたんじゃないのかい？

実はそう。それで、やっぱり誰かに紹介してもらった方がいいんじゃないかと思つて、友達の家で相談に行つたの。

友達はなんて言つてた。

努力はしてみるけど、あんまり期待しないでほしいって。

そう言われても、仕方ないね。おまえはもう若くないんだから。

やっぱり、自分の間は、ブリュンヒルデで働いた方がいいんじゃないですか？

部外者は黙つてろよ。これは姉さんの問題だ。

本当は、なつきちゃんをクビにしたくないくせに。

そうじゃない。俺はただ、姉さんのためを思つて。

だつたら、こうしたら――

（一平に）だつたら、こうしたらどうです。九時から三時までは日出子さんが働いて、三時から九時まではなつきちゃんが働くんです。そうすれば、三時から後は、仕事を探しに行けますよ。

なるほど。悔しいけど、なかなかいいアイデアだ。どうだい、母さん？

私も今、同じことを言おうと思つてたんだよ。

後は、姉さんの気持ち次第だ。姉さんがそれでよければ、なつきちゃんに電話してやるよ。

よろしく願ひします。

よし、決まりだ。

じゃ、食事にしよう。支度はもうできてるんだ。今日のおかずは、アキラの嫌いなピーマンの肉詰めだよ。

アキラ 俺、おかずはケーキでいい。
日生子 さあ、サトル。

日生子・アキラ・サトル・一平が去る。

千代 あんたはどうする。一緒に食べていくかい？

明 いいんですか？

千代 もっと話がいんだろう、日生子と。

明 誤解しないでください。僕は日生子さんに対して、邪な気持ちには。

千代 わかっているよ。あんたは、死んだ父ちゃんによく似てるんだ。だから、顔を

明 見てれば、気持ちが変わる。あんたはただ、淋しいんだ。そうだろう？

千代・明が去る。

友子 明くん、いつまでそこにいるつもりなの？

そこへ、佐渡島がやってくる。

佐渡島 やっぱり止められませんでした。弟さん、かなり怒っちゃってて。

友子 そう。ありがとうございます。

佐渡島 映画はどうします？ 続きを見ますか？

友子 止めていいわ。これから、病院に行くから。

佐渡島　　じゃ、僕が運転します。

佐渡島が映写機のスイッチを押す。友子・佐渡島が去る。

二〇〇三年五月十五日昼。池袋にある大学の、智の研究室。智・春菜がやってくる。

春菜　先生、今日の授業はこれでおしまいですよね？

智　五十六分後に会議が始まる。それまでは、午前中の授業で集めたレポートを読む。全部で三十八人分。残念ながら、君の相手をしてる時間はない。

春菜　どうして私を避けるんですか？

智　避けてない。僕は忙しいって言ったんだ。

春菜　でも、監督さんの家に行った日から、全然相手にしてくれないじゃないですか。映画の中で経験したこと、いろいろ聞きたいのに。

智　湯沢くん、その話はやめてくれないか。

春菜　どうしてですか？

智　僕は非現実的なものが嫌いだ。だから、映画も演劇もデイズニードも行かない。学生たちにも、「そんな所に行く暇があったら、図書館に行け」って言うてる。その僕が、よりによって、映画の中に入ったなんて。人に聞か

春菜　れたら、恥ずかしい。

智　大丈夫ですよ。誰も信じませんから。

春菜　そうじゃなくて、僕が信じてると思われのがイヤなんだ。でも、信じてるんでしょう？　自分が映画の中に入ったこと。

智 春菜
智 春菜

仕方ないだろう。実際に経験してしまっただから。先生にも少しはわかりましたか？ 映画のすばらしさが。僕は一週間前まで、こう思っていた。映画なんて、嘘に過ぎないって。嘘だとわかっていのに、なぜ騙されるのか。僕には理解できなかった。騙されたくて、見るんじゃないんです。信じたくて、見るんです。しかし、嘘は嘘じゃないか。そう思っていたのに、映画の中には嘘が一つもなかった。あそこで出会った人たちは、芝居なんかしてなかった。それぞれの人生を生きていたんだ。

そこへ、佐渡島がやってくる。

佐渡島 春菜
佐渡島 智
佐渡島 智
佐渡島 智
佐渡島 春菜
佐渡島 智
佐渡島 春菜

こんにちわ。佐渡島さん、どうしたんですか、いきなり。先生にお話したいことがあります。映画の中に入れて言うなら、お断りしますよ。監督の奥さんから、電話は来ましたか？ いいえ、あれから一度も。実は、昨夜、監督の容態が悪化したんです。血圧と心拍数が急激に落ちて、その影響が他の内臓や脳にも出て。原因は何ですか？ もしかして、心臓？ ええ。入院した時から、機能が低下してると言われたんですが。僕らの父は心不全で亡くなったんだ。父の家系は、代々、心臓が弱いらしい。（佐渡島に）でも、そこまで悪いってわけじゃないんでしょう？

佐渡島

春菜

智
佐渡島

智
佐渡島

智
佐渡島

智
佐渡島

智
佐渡島

春菜

智

いや、かなり危険な状態らしいです。でも、原因がわからないから、手の施しようがないって。

原因は明らかじゃないですか。魂が体から抜け出したからですよ。

しかし、医学的には全く根拠がない。

その通りです。医者には、何もできません。監督を助けられるのは、先生だけなんです。

しかし、兄は、僕の言うことなんか聞かない。

それは、監督が自分の体のことを知らないからです。このままでは死ぬって言えば、きつと帰ろうって決意します。

そうとは限らないよ。

なぜそう言い切るんです。

兄は、自分の思い通りに生きてきた。大学を中退して、映画作りにのめ込んで。あまりに無茶苦茶な生活を続けたせいで、体を壊して入院したこともある。酒場で喧嘩して、留置場に入れられたことも。そのたびに、母に苦労をかけて。でも、兄は態度を改めなかった。自分の映画が撮りたくて、母の気持ちなんか、考えもしなかったんだろう。いや、いずれは恩返しをしようと思っていたのかもしれない。ところが、母は五十で亡くなった。兄が監督になる前に、亡くなったんだ。

だからって、自分も死のうとは思わないでしょう。

それはそうさ。しかし、兄は、映画の中で母と再会してしまった。

でも、映画の外では、奥さんが待ってるんですよ。監督さんが死んだら、奥さんはどうなるんです。

(佐渡島に)お姉さんは今、何をしてるんです。

佐渡島

自宅で映画を見てます。何度も何度も。いつかは、自分も中に入れるんじゃないかって。

智

佐渡島くん、行こう。

佐渡島

映画の中に入ってくれるんですか？

智

兄のためじゃない。お姉さんのためだ。

五月十五日夕。明のマンション。友子がやってくる。

友子

智くん、来てくれたのね？

智

ひどい顔色だ。昨夜は徹夜ですか？

友子

やっぱり、私じゃダメみたい。十回近く見たのに、入れない。

智

兄は中で何をしてるんです。

友子

それが、変なのよ。一週間前までは、時々、顔を出さただけだったのに、今は

春菜

ほとんど出さっぱりなの。

友子

出さっぱりって？

春菜

千代の家に住んでるのよ。まるで、家族みたいに。

友子

そんなことをして、ストーリーは変わらないんですか？

春菜

逆よ。明くんは、ストーリーを変えようとしてるの。

友子

自分が作ったストーリーを？

春菜

アキラは新発田を助けるはずでしょう？ あ、アキラっていうのは、子供の

友子

方よ。そのアキラが、だんだん新発田を避けるようになってきてるの。

智

ちよっと待っててください。新発田を助けるのはアキラなんですか？

友子

そうよ。だって、新発田はアキラの担任だもの。

智

佐渡島くん、映画を映してください。

友子

(佐渡島に)ごめん。巻き戻してください？

智

途中から構いませんよ。あと、この映画のシナリオはありますか。すぐに

友子

読みたいんですが。

佐渡島

明くんの書齋にあると思う。今、取ってくる。

佐渡島

じゃ、映します。

佐渡島がスイッチを押す。映画の上映が始まる。友子が去る。

一九八〇年五月二十四日昼。ブリュンヒルデ。三条・なつきがやってくる。

なつき

三条さん、この前の話、考えてくれました？

三条

あれはダメだと言ったはずだ。ドイツパンの店が、クロワッサンを出すわけ

なつき

にはいかない。

智

じゃ、あんぱんは？

春菜

(佐渡島に)このシーンは？

春菜

もう後半ですね。日出子がブリュンヒルデで働くようになってから、二週間

智

後ぐらいじゃないですか？

春菜

詳しいね。私もあの後、何度も見たんです。映画館に通って。

春菜

私もあの後、何度も見たんです。映画館に通って。

そこへ、日出子がやってくる。

日出子

なつきちゃん、今度はあんぱん？

なつき

三条

なつき

三条

ええ。お客さん、きつと喜ぶと思うんですよね。専務にも言ったんですけど、全然聞いてもらえなくて。きつと社長が怖いんです。でも、三条さんなら、ズバツと言ってくれるんじゃないかと思って。言う価値のある提案なら、喜んで言うさ。しかし、クロワッサンはダメだ。あんぱんはもつとダメだ。でも、このままじゃ、うちの店はさびれる一方ですよ。確かに、ドイツパンは地味かもしれない。若い女の子から見たら、お洒落じゃないのかもしれない。しかし、ドイツパンにはドイツパンの良さがある。それが評価される日はきつと来る。

そこへ、新発田がやってくる。

新発田

日出子

新発田

春菜

佐渡島

なつき

新発田

なつき

三条

日出子

長岡さん、ちよつといいか。新発田くん、学校はどうしたの？今日は土曜じゃないか。大急ぎで掃除を終わらせて、走ってきたんだ。あれ？このシーンには、新発田は出てこないはずですけど。そうですね。本当は、三条がドイツパンのすばらしさを切々と語るはずだったんです。三条にとつては、唯一のナガゼリだったのに。（新発田に）パンをお求めでしたら、お店の方へどうぞ。違うんです。僕は、長岡さんに会いに来たんです。なるほど。三条さん、私たちはお邪魔みたいです。そうだな。なんか、もうちよつとしゃべりたい気もするけど、仕事に戻るか。私も行く。新発田くん、私はまだ仕事かなの。話は後にして。

新発田
日出子
新発田

わかった。終わるまで、ここで待ってるよ。
やめてよ、そんな高校生みたいな真似。後で家に電話すればいいじゃない。
でも、昨夜、電話した時は、「今、忙しいから」って、すぐに切ったじゃないか。

日出子

本当に忙しかったのよ。アキラの宿題を手伝ってて。

新発田

僕は宿題なんか、出してないよ。

日出子

嘘よ。アキラだけに出したでしょう？ 算数のドリルを十五ページも。

新発田

長岡さん。僕には一体何のことだか。

日出子

私は長岡じゃない。村上なの。まだ離婚してないんだから。

日出子が去る。

新発田
三条

すいませんでした。お騒がせして。
気を落とさないでください。ドイツパンにはドイツパンの良さがあるんです。
それが評価される日はきっと来ます。

新発田

よくわからないけど、励ましてくれてるんですね？ ありがとう。

なつき

話って、何なんですか？ よかったら、私が伝言しますけど。

新発田

僕らは、明日、一緒に映画に行くはずだったんです。でも、急に行けなくな

なつき

ったって言われて。

新発田

また何かまずいことを、言っちゃったんじゃないですか？

そうかもしれないけど、僕にはまるで覚えがない。五月の最後の日曜日は、
明日なのに。すいません。やっぱり、直接、長岡さんと話をします。(と歩き出す)

三条
（新発田を押し止めて）困りますよ。勝手に中に入られちゃ。そう言わずに、ちよつとだけ。仕事の邪魔はしませんから。

新発田が奥へ行こうとする。三条がそれを押し止める。

智
遅いなあ、お姉さん。

春菜
どうしてシナリオが必要なんですか？

智
僕はこの映画を見てない。僕が実際に経験したことと、どこが同じでどこが違うか、確かめたいんだ。

佐渡島
この映画はすべて事実です。

智
そうとは限らないよ。ちよつと、お姉さんを見てくる。（と歩き出す）
春菜
でも、先生が見てなくちゃ、意味がないんですよ。先生！

智が去る。そこへ、日出子・一平がやってくる。

一平
おいおい、何の騒ぎだ。

なつき
この人がいきなり興奮しちゃって。

日出子
新発田くん、まだここにいたの？
言っただろう、ここで待ってるって。

新発田
私は断ったはずよ。一平、仕事に戻ろう。

一平
（新発田に）先輩、事情はよくわからないけど、姉は今、仕事なんです。また出直してもらえませんか。

新発田
（日出子に）じゃ、一つだけ教えてくれ。なぜ急に行けなくなっただ。

日 出 子
新 発 田
アキラに止められたのよ。新発田先生なんかと行かないでって。
どうしてそんなことを。

日 出 子
わからないの？ あなたがアキラを目の敵にするからよ。

一 平
（新発田に）これで気は済みましたよね？ じゃ、今日は帰ってください。

新 発 田
（日出子に）目の敵ってどういうことだ。僕は、僕のクラスの生徒たちがみ

んな好きだ。好きだからこそ、平等に扱うようにしてる。

日 出 子
だったら、どうして家に音楽の教科書を持ってきてくれたの？

新 発 田
あれは、アキラくんが緊張しないようにと思ってる。

日 出 子
あなたは、アキラを特別扱いした。それは、アキラが私の子供だったからよ。

新 発 田
アキラには、それがイヤだった。他の子と同じように扱ってほしかった。だ

日 出 子
から、あなたに素っ気ない態度を取った。それが、あなたには気に入らな

ったのね。アキラのすることにはいちいち文句をつけて、罰として宿題を出し

て。
アキラくんがそう言ったのか？ 君は、それを信じたのか？

新 発 田
信じるに決まってるでしょう？ あなたは他人だけど、アキラは私の子供だ

日 出 子
もの。

新 発 田
村上智、これはどういうことだ。君が言ったことは嘘だったのか？

一 平
先輩、もうやめてください。

新 発 田
どうなんだ、村上智！ 村上智！

一 平
先輩。（と新発田をつかむ）

そこへ、智が飛び出す。冊子を持っている。智が一平を突き飛ばす。

春菜

一平

智
一平

先生、いつの間に。
(智に)おまえ、また来たのか。
(新発田の前に立って)この人は悪くない。悪いのは、僕の兄なんだ。
黙れ!

一平が智に殴りかかる。智が避ける。三条が智につかみかかる。智が避けて、三条を突き飛ばす。一平が智をつかむ。新発田が一平を突き飛ばす。一平が倒れる。

新発田

智

あ、ごめん。
腕力では勝ち目がない。とりあえず、逃げましょう。

智・新発田が走り去る。日出子・一平・三条・なつきも去る。

二〇〇三年五月十五日夕。明のマンション。

9

春菜

どういうことですか？ 先生はまだこっちの世界にいるのに。

佐渡島

ひよつとすると、今のは、監督が変装した姿だったのかもしれないよ。

春菜

佐渡島さん、本気で言ってます？

佐渡島

いいえ。でも、最近の特殊メイクって、凄いですよ。身長の十センチや二

春菜

十センチ、簡単に——
(奥に向かって) 先生、大変です！ 先生が映画の中に出てきました！

そこへ、友子がやってくる。

友子

佐渡島くん、こっちに来て。智くんが倒れちゃったのよ。

春菜

先生が？ どうしてですか？

友子

わからない。書齋を出ようとしたら、智くんが飛び込んできたの。私の手か

春菜

らシナリオを筆記取って、パラパラめくってたと思ったら、急に。

佐渡島

そうか。やっぱり、今のは先生の魂だったんですよ。やっぱり、監督が変装して——

友子

でも、先生は映画を見てなかったんですよ。やっぱり、早くきて。

春菜・友子・佐渡島が去る。
一九八〇年五月二十四日昼。ブリュンヒルデの近くの路上。智・新発田がやってくる。
智は冊子を持っている。

新発田

いつ戻ってきたんですか？

智

今ですよ。あなたの声が聞こえたんです。「村上智！」って怒鳴る声か。

新発田

すいませんでした、急に呼びつけたりして。

智

構いませんよ。僕も、ここに来ようと思ってたんです。今日は、五月二十四

日ですよ？

新発田

ええ。五月の最後の日曜日は、明日です。

智

（冊子をめくって）とすると、今のパン屋の場面は、シーン三十二か。

新発田

その本は何ですか？

智

シナリオですよ、この映画の。

新発田

へえ、それが。でも、なぜそんなものを？

智

僕は誤解していたんです。この映画は、二十三年前の出来事を忠実に再現し

たものだと。しかし、一カ所だけ、例外があった。事実には反する部分があっ

たんです。

新発田

事実には反する部分？

智

（冊子をめくって）シーン五で、あなたはこう言いますね。「遅くなって、

すいません。六年三組の担任の、新発田です」。

新発田

長岡さんが転校の手続きに来た時ですね？ 確かに、そう言いました。

智

僕はこのシーンを見てない。だから、気づかなかったんだ。二十三年前、明

新発田　の担任は信濃川だった。新発田は智の担任だったんです。
え？　それはつまり――

新発田　新発田を助けたのは智だった。明じゃなかった。明は、母親の離婚には反対
だったんです。

新発田　それじゃ、今、アキラくんがしてることは、正しいっていうんですか？

智　よし、行きましよう。

新発田　行くって、どこへ？

智　シン三十三は、おばあちゃんの家です。兄はきつとそこにいる。

智・新発田　が去る。

五月二十四日昼。千代の家。サトルがやってくる。本を読み始める。そこへ、明・アキラがやってくる。

アキラ　ちよっと待ってて。トイレに行ってくるから。

アキラ　が走り去る。

明　『坂の上の雲』の五巻か。バルチック艦隊は、もう日本に着いたかい？

サトル　連合艦隊にやられて、全部、海に沈んだよ。

明　なんだ。最後まで読み終わったのか。

サトル　三日前にね。でも、六巻を持って来なかったから、また最初から読み始めたんだ。

明　僕が買ってあげようか、六巻。

サトル　　いいよ。父さんの本棚にあるから。

そこへ、アキラがやってくる。

アキラ　（明に）お待たせ。サトル、俺、ちょっと出かけてくるからな。

サトル　どこに行くの。

アキラ　新宿だよ。おじさんが、映画を見に行こうって。

明　（サトルに）君も一緒に行かないか？

アキラ　そいつは誘わなくていいよ。（サトルに）映画なんかバカバカしくて、見た

明　でも、一人じゃ、淋しいだろう。

アキラ　いいんだよ。サトルは、本が友達なんだから。さあ、行こう。

アキラが去る。

明　君も来いよ。僕は、君とも友達になりたいんだ。

サトル　俺はなりたくない。

明　君は、僕が嫌いなのか？

サトル　嫌いだよ。おじさんも、兄さんも、母さんも、おばあちゃんも。

そこへ、アキラがやってくる。後から、智・新発田がやってくる。

アキラ　お客さんだよ、おじさんに。

明智 明智 明智 明智 明智 新發田 新發田

新發田
アキラ
アキラ

僕に？
兄さん、迎えに来たよ。
智、おまえ、ドイツに帰ったんじゃないのか？
冗談を言ってる場合じゃない。今すぐ、外の世界へ帰るんだ。
悪いけど、今、忙しいんだ。これから、アキラと映画を見に行くんで。さあ、アキラ。
出かけるのは後にしてください。いいね、アキラくん？
でも、今、出かけないと、夕飯までに戻ってこれなくなるよ。
僕らは君にも話があるんだ。映画はまた今度にしてくれ。
でも。
アキラ、その人の言うことは聞かなくいい。ここは学校じゃないんだから。
兄さん、頼むから、まじめに聞いてくれ。兄さんがここに來てから、外の世界では二週間も過ぎた。その間、兄さんはずっと眠り続けている。病院のベッドの上で。
なぜ入院なんかさせたんだ。俺はどこも悪くない。
一昨日まではそうだった。でも、昨夜、容態が悪化したんだ。心臓の機能が低下して、かなり危険な状態になってる。
デタラメを言うな。眠ってるだけで、なぜ心臓が悪くなる。
決まってるだろう？ 兄さんがここにいるからだよ。
だとしたら、おまえの心臓も危ないな。
ああ。その可能性もないとは言えない。
やっぱり、おまえの話はデタラメだ。おまえが俺を助けるために、命をかけるはずがない。

智 もちろんだよ。兄さんがどうなるかと、僕には関係ない。しかし、お姉さんを悲しませるわけにはいかない。だから、ここに来たんだ。

そこへ、日出处子がやってくる。

日出处子 新発田くん、今度は家に来たの？

サトル お帰り、母さん。

日出处子 (新発田に) いい加減にしてよ。あなたとはもう話をしたくないの。

智 日出处子さん、あなたは誤解している。

日出处子 誤解って何よ。

智 新発田さんは宿題なんか出していないんだ。一度も。

日出处子 どうしてあなたが新発田くんを庇うの？

智 僕は事実を言ってるんです。そうでしょう、新発田さん。

新発田 (日出处子に) 僕は、十三年前に教師になってから、一度も宿題を出したことがない。僕は、宿題は出さない主義なんだ。勉強は学校でしっかりやればい

い。家に帰ったら、友達と遊んだり、家の手伝いをしたりしてほしいから。

日出处子 でも、アキラは先週ぐらいから、毎日、宿題が出たって。

智 みんな嘘だったんですよ。そうだろう、アキラくん。

アキラ (走り出す)

日出处子 待ちなさい、アキラ！(とアキラの体をつかむ)

アキラ 放せよ。

日出处子 本当のことを言ってる。あんた、私に嘘をついたの？

智 アキラくんを責めないでください。彼は、兄に言われた通りにしただけなん

新
発
田

だから。
何だって？

兄は、アキラくんにこう言ったんです。新発田先生の邪魔をしろって。新発田先生は、君のお母さんが好きだ。結婚したいと思ってる。でも、もし二人が結婚したら、君は二度とお父さん会えなくなる。それでもいいのかって。そうだろう、アキラくん？

ア
キ
ラ

違うよ。

智

アキラくん、君は悪くない。悪いのは、みんな兄なんだ。

ア
キ
ラ

違うんだってば。おじさんは邪魔しろなんて言っていない。ただ、よく考えろって言ったんだ。母さんの再婚相手が新発田先生でいいかどうか。それで、母さんが幸せになれるかどうか。

日
出
子

本当ですか、佐渡島さん。

智

悪気はなかったんです。僕はただ、この映画を――

明

映画って何のことだい？　ここは現実だ。そう言ったのは、兄さんだろうか？

明

黙れ、智。

智

僕と一緒に帰ろう。この人たちには、この人たちの人生があるんだから。

明

断る。(と走り出す)

智

兄さん！

明が走り去る。後を追って、智が走り去る。

日
出
子

新発田くん、ごめんなさい。まさか、アキラが嘘をついてるとは思わなかったから。アキラ、新発田先生に謝りなさい。

アキラ

日 出 子

新 発 田

日 出 子

アキラ

日 出 子

新 発 田

日 出 子

アキラ

日 出 子

新 発 田

日 出 子

新 発 田

日 出 子

サトル

日 出 子

サトル

そこへ、千代・智がやってくる。

智
新 発 田

(頭を下げる)

頭を下げるだけじゃなくて、ちゃんと「ごめんなさい」って言うのよ。

いや、今ので十分だよ。アキラくんが悪気はなかったんだから。

でも、やっていいことと悪いことがあるわ。いい、アキラ。私はまだ離婚してないの。もし離婚したとしても、当分、再婚するつもりはない。変な誤解

はしないでほしいわ。

じゃ、母さんは新発田先生が好きじゃないの？

好きよ。でも、それはあくまでも、友達としてよ。新発田くんだって、そう

でしょう？

ああ、もちろんだよ。

昼間は、ひどいことを言って、ごめんなさい。お詫びについていうのはなんだ

けど、明日、一緒に映画に行かない？

いいのかい？ やったー！

ただし、この子たちも一緒よ。

全然構わないよ。僕の、男としての実力をアピールするチャンスだ。

僕が行かないよ。

どうしてよ。

僕は映画なんか見たくない。映画なんて、嘘に過ぎないじゃないか。

そんなことはないよ。映画の中の人たちにとっては、現実なんだから。お兄さんはどうしました？

智 逃げられました。台所で、千代さんに邪魔されて。
千代 人の家の中で、追いかけてこをするからだよ。
智 (新発田に) まだ近くにいるかもしれない。一緒に探してくれませんか。
新発田 わかりました。(日出子に) じゃ、明日の待ち合わせは――
智 (冊子をめくって) 午前十一時に、新宿の紀伊國屋書店の入り口で。
新発田 じゃ、また明日。

智・新発田が去る。

千代 行くことにしたんだね、映画。

日出子 アキラが言っていたことは全部、嘘だったの。だから、そのお詫びよ。

千代 本当にそれだけかい？

アキラ (日出子に) 映画の後はどうする？ やっぱ、レストランでディナーだよ

ね？

日出子 あんた、少しは反省してるの？

千代 (アキラに) 掃除をすれば、しっかり反省できるだろう。今日は、前の通り

のゴミ拾いだ。

アキラ えー！

日出子・千代・アキラ・サトルが去る。

二〇〇三年五月十五日夕。明のマンション。春菜・友子がやってくる。

春菜 あれ？ アキラがゴミ拾いをしてる。こんな場面、ありませんでしたよね？
 友子 ええ。智くんはいないみたいね。
 春菜 きつと、他の場所でも、監督さんを探してるんですよ。
 友子 アキラなんか映さなくて、智くんを映せばいいのに。
 春菜 でも、主役は一応、アキラですから。

一九八〇年五月二十五日朝。新発田のアパート。智・新発田がやってくる。智は冊子を、新発田はネクタイを持っている。

智 もう十時じゃないですか。どうして目覚ましをかけなかったんです。

春菜 あ、先生だ！

新発田 (智に) 知らない間に寝ちゃったんで。

智 よりによつて、デートの日に寝坊するなんて。あなたがモテない理由がよくわかりましたよ。

新発田 悪いのは、僕だけじゃない。あなたが、「今夜はとことん飲もう」なんて言い出すから。

智 だからって、朝まで付き合うことはなかった。イヤなら、先に寝ればよかつたんです。

新発田 それはそうかもしれないけど。ああ。ネクタイなんて、滅多にしないから、結び方を忘れちゃった。

智 そんなの、歩きながらでいい。早く出かけましょう。

智・新発田が去る。

春菜 今、デートって言いましたよね？

友子 言ったわ。新発田は、日出子と映画に行けることになったのよ。

春菜 先生が変えたんですよ。元のストーリーに戻したんです。

友子 でも、智くんも一緒に行くつもりなのかな？

春菜 そのようですね。先生って、そういうところ、本当に鈍いんです。

五月二十五日朝。千代の家。千代がやってくる。

千代 アキラ、サトル、早くしな。もう十時だよ。

そこへ、アキラ・サトル・一平がやってくる。

アキラ 俺たちの準備はできてるんだ。母さんがまだなんだよ。

千代 今さら、お洒落したって、全部バレてるのに。

一平 母さん、全然わかってないなあ。姉さんにとっては、十三年ぶりのデートな

千代
アキラ
一平

んだ。気合いが入るのは当然じゃないか。
子連れのデートなんて、聞いたことないけどね。
俺たち、邪魔者？

気にするな。おまえたちがいた方が、雰囲気は固くならなくていい。先輩は
プレッシャーに弱いんだ。高校時代も、試合のたびに下痢をして、結局、レ
ギヤラーになれなかった。

ということは、今日も下痢だね。

アキラ
千代
サトル

サトル、おまえ、よく行く気になったね。
仕方ないよ。イヤだって言っても、聞いてもらえるわけないし。

そこへ、日出子がやってくる。

日出子
千代
日出子
一平
日出子
千代
一平
日出子
アキラ
日出子

お待たせ。

なんだい。山口百恵みたいな恰好でもしてくるのかと思ったのに。

この年で、できるわけないでしょう？

母さんは年だ年だって言うけど、俺はそうは思わないよ。姉さんはまだ若い。
もっと自信を持っていいんじゃないかな。

ありがとう、一平。

（一平に）おまえにしては、ずいぶん気の効いたことを言うじゃないか。
俺にも、やっと春が来たからね。少しは女心がわかるようになったのさ。

私は、それが勘違いでないことを祈るだけだよ。

母さん、急がないと、遅刻しちゃうよ。

わかっている。行こう、サトル。

日出子・アキラ・サトルが去る。

一平　　母さん。俺は、姉さんの再婚に賛成だよ。先輩なら、きっと姉さんを幸せにしてくれる。

千代　　それはそうだろうよ。でも、問題は、子供たちの気持ちさ。

千代・一平が去る。

春菜　　今のシーンは、あんまり変わってませんでしたよね？

友子　　間違いない。元のストーリーに戻ったのよ。

春菜　　でも、監督さんがこのまま黙ってるとは思えません。どこかで待ち伏せでも

友子　　してるんじゃないですか？

智くんはシナリオを持ってる。きっと止めてくれるわよ。

五月二十五日昼。新宿にある、映画館の前。智・新発田がやってくる。智は冊子を持っている。

新発田　　よかった。まだ来てなかった。

智　　じゃ、僕はこちらまでです。健闘を祈ってますよ。

新発田　　え？　あなた、帰っちゃうんですか？

智　　情けない顔しないでください。デートは生まれて初めてじゃないでしょう？

新発田　　それはそうですけど、子連れデートの経験はなくて。

智

そんなの、僕にもありませんよ。あ、来た。

智が去る。そこへ、日出口・アキラ・サトルがやってくる。

日出口

ごめんね。待った？

新発田

いや、僕も今、来たところなんだ。

サトル

おはようございます。

新発田

ああ、おはよう。何だか、学校で会った時の挨拶みたいだな。今日は日曜なんだから、もう少しリラククスしよう。

アキラ

先生、一つ、質問があるんだ。映画を見終わった後はどうするつもり？

日出口

アキラ。

新発田

(アキラに)それはもちろん、まっすぐ家に帰るよ。決まってるじゃないか。

アキラ

えー？ 食事はしていかないの？

新発田

あ、食事？ 食事はしてもいいんじゃないかな。長岡さんさえよければ。

日出口

母さんには、食べてくるって言ってる。

新発田

よし、じゃ、僕がご馳走しよう。この近くに、うまいラーメン屋があるんだ。

アキラ

ラーメン？ 先生、それだから、モテないんだよ。

日出口

アキラ、失礼でしょう？

新発田

いや、アキラくんの言う通りだ。せっかく新宿まで来たんだから、もつと豪華な食事にしよう。

アキラ

やったー！

日出口・アキラ・サトル・新発田が去る。そこへ、明がやってくる。反対側から、智が

やってくる。冊子を持っている。

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

智 春菜

やっぱり、ここに来ると思ったよ。
やったー！ 先生が監督さんをつまえましたよ。

（明に）もう時間がないんだ。今すぐ、外の世界に戻らないと、死ぬかもしれないんだ。

俺のことより、自分のことを心配したらどうだ。

僕は一人では帰らない。兄さんを残して、帰るわけにはいかない。

勝手にしろ。

これ以上、何ができるんだ。新発田は日出子と映画を見に行った。アキラは

新発田を邪魔するのを止めた。何もかも、元通りになった。

これは俺の映画だ。俺の変えたいように変える。

勝手なこと言うな。最初に事実を変えたのは、兄さんじゃないか。

この映画を全部見たのか。

見てない。かわりに、これを読んだんだ。（と冊子をめくって）なかなかおもしろかったよ。僕のしたことと、兄さんのしたことと、すっかり入れ替わ

ってて。

え？ どういうこと？

（明に）新発田先生は、僕の担任だった。気は小さいけど、優しい人だった。

この人なら、母さんを幸せにしてくれるだろうと思った。だから、僕は応援

したんだ。

嘘。新発田を応援したのは、アキラじゃなかったのか？

（明に）なぜ変えたんだ。自分をいい子に見せるためか。

明

明智

明智智

明が走り去る。後を追って、智が走り去る。

そうじゃない。俺は、あの時の自分が許せなかったんだ。俺さえ反対しなければ、母さんは新発田先生と再婚できた。父さんの家に帰って、苦労することもなかった。五十で死ぬこともなかった。兄さんは、自分の思い通りの映画を作った。それで十分じゃないか。完成してから、気づいたんだ。この映画は嘘だって。俺は、自分を許したかっただけなんだ。そんな映画に、何の価値がある。俺は、自分がしたことを正直に映画にするべきだったんだ。今さら気づいても手遅れだ。そんなことはない。ラストシーンはまだ先だ。(と走り出す) 兄さん！

春菜

友子

春菜

友子

春菜

奥さんは知ってたんですか？ この映画が、事実と違うって。知らなかった。明くんはそんなこと、一言も言ってなかったから。そんなにこの映画が気に入らないなら、新しく撮り直せばいいのに。でも、この映画は残るわ。映画の中の現実も。そうです。映画の中に人間にとっては、現実なんです。アキラにとっても、サトルにとっても。あの子たちの人生を変える権利は、監督さんにはないんです。

五月二十五日昼。池袋にある、映画館の中。日出子・アキラ・サトル・新発田がやってくる。

新発田

よし、ここに座ろう。順番は、僕、アキラくん、サトルくん、長岡さんでいいかな？ 反対意見がある人、手を挙げて。

日 出 子

学級会じゃないんだから、話し合いは必要ないんじゃない？

アキラ

そうだよ。周りの人も見てるし。

新発田

ごめん。つい、いつもの癖で。

日 出 子

アキラ、トイレは？ 始まる前に、行ってきた方がいいんじゃない？

アキラ

家を出る時、行ってきたよ。

新発田

サトルくんは？

サトル

俺も行ってきたよ。兄さんが行く前に。

日 出 子

サトルはアキラと違って、しっかりしてるもんね。

新発田

そうみたいだね。サトルくんがアキラくんみたいだったら、長岡さんは今頃、

アキラ

過労で死んでるだろう。

新発田

それって、どういう意味？

アキラ

あ、暗くなってきた。始まるよ。

新発田

そこへ、佐渡島がやってくる。

佐渡島

奥さん、大変です。今、病院から電話がありました——

友 子

病院から？ まさか、明くんにかか。

佐渡島

容態が急変して、集中治療室に運ばれたそうです。すぐに車を出しますから。

友 子

タクシーを呼ぶからいいわ。あなたはここにいて。

佐渡島

しかし。

友子

春菜

映画が止まったら、どうするのよ。あなたはここで、最後まで見届けて。湯沢さんと一緒に。わかりました。

友子が去る。そこへ、智がやってくる。冊子を持っている。

智

そうだ。僕らはこの映画を見たんだ。(と冊子をめくって) 題名は、『クレマー、クレマー』。

そこへ、明がやってくる。

明智明

覚えてるか？ どんな話だったか。忘れるわけないだろう。僕が最初から最後まで見た、唯一の映画だ。主人公は、ダステイン・ホフマンが演じる、広告プランナーだ。その妻が、ある日、突然、家出する。二人の間には、七歳になる息子がいた。ダステイン・ホフマンは、男手一つで、その子を育てることになる。しかし、家事なんてやったことがなかったから、フレンチトースト一つ、満足に作れない。その姿を見て、息子は呆れる。母親を恋しがる。映画を見ながら、父さんのことを思い出したよ。僕らは父さんを一人で残してきた。父さんにも、フレンチトーストは作れない。その上、食べさせる息子もいないんだ。この映画を見てから、おまえの態度は変わったな。それまでは、新発田先生を応援してたのに、急に口をきかなくなっちゃった。(と歩き出す)

明智明

智　　そうだよ。僕は『クレーマー、クレーマー』を見て、映画が嫌いになったんだ。(周囲を見回して) 兄さん？ 兄さん？

明が去る。後を追って、智が去る。

新発田　　なかなかいい映画だったな。アキラくんの選択は正しかったよ。

日　出　子　　そう？　　なんか、今の自分の立場に近すぎちゃって、冷静に見られなかった。長岡さんは、メリル・ストリープとは違うよ。家出する時、ちゃんと子供を連れてきたじゃないか。

アキラ　　母さん、帰ろう。

新発田　　よし、次は食事だな。アキラくんは何を食べたい？　小学生なら、やっぱりカレーかハンバーグかな。

アキラ　　俺、何も食いたくない。

新発田　　え？　　さっきは食事をしていこうって。

アキラ　　帰ろうよ、母さん。

日　出　子　　そう？　　あんたがそう言うなら、帰ってもいいけど。

日　出　子　　アキラ・サトル・新発田が去る。

佐渡島　　どういうことだ？　　映画が元に戻ってる。

春菜　　今のシーンなんか、完全に元のままですよね？

佐渡島　　ええ、そうです。次は、映画館の前で、新発田と別れるシーンです。いよいよ、新発田が告白するシーンですよ。

春菜

先生もこのシーンを見て、勉強してほしいもんだわ。

五月二十五日夕。映画館の前。新発田が走ってくる。

新発田

サトルくん！ サトルくん！

そこへ、智が走ってくる。

智

呼びましたか？

新発田

あなたじゃなくて、子供の方のサトルくんです。いなくなっちゃったんですよ。外へ出る時。

そこへ、日出子・アキラがやってくる。

日出子

新発田くん、いた？

新発田

いや、いない。(智に) あなたはサトルくんを見ませんでしたか。

日出子

(智に) どうしてあなたがここにいるの？
兄を探しに来たんです。あなたたちの邪魔をするんじゃないかと思って。そうか。

新発田

何ですか？

サトルは、兄と一緒にだ。兄が連れ去ったんだ。

智が走り去る。後を追って、日出子・アキラ・新発田が走り去る。

二〇〇三年五月十五日夕。明のマンション。

佐渡島 監督がサトルを？ 嘘だ。監督がそんなこと、するわけがない。

春菜 でも、他に可能性がありませんか？

佐渡島 たとえば、迷子になったとか？

春菜 佐渡島さん、サトルは五年生ですよ。

佐渡島 僕は去年、デイズニールで迷子になりましたよ。

春菜 あなたの話は聞いてません。次のシーンは、千代の家でしたよね？

佐渡島 ええ。でも、どうなるかはわかりませんよ。ここから先は、全くの新作ですから。

一九八〇年五月二十五日夕。映画館の近くの路上。サトルがやってくる。後を追って、明がやってくる。

明 どこに行くんだ。

サトル どこだっさいだらう。

サトル 君がいなくなったら、お母さんが心配する。家に帰ろう。
イヤだ。

明 何を怒ってるんだ。言いたいことがあつたら、お母さんに直接、言えばいいだろう。

サトル 言つたつて、無駄だよ。聞いてくれるわけない。

明 君のお母さんは、そんな人じゃない。君のことをちゃんと考えてる。

サトル だったら、どうして家出したんだ。

明 君は、お父さんと一緒にいたかったのか？

サトル そうじゃないよ。

明 いや、君はお父さんが好きなんだ。だから、怒ってるんだろう。

サトル そうじゃないつて、言ってるだろう。(と歩き出す)

明 サトル！

サトルが去る。後を追つて、明が去る。
五月二十五日夕。千代の家。智・日出子・アキラ・新発田がやってくる。智は冊子を持つている。

日出子 母さん！ 一平！

そこへ、千代・一平がやってくる。

一平 あ、お帰り、姉さん。

日出子 サトルは？

一平 まだ帰ってきてない。(智を見て) あれ？ おまえは。

新発田 この人のことはどうでもいい。そつちの結果を報告してくれ。

日出子

一平、ブリュンヒルデには行ってみた？
三条に電話して、行ってもらった。そろそろ返事が来る頃だ。

新発田

担任には電話したか？
すぐにしたよ。信濃川先生だった？ まじめな先生だね。日曜なのに、学校

新発田

で仕事してた。
音楽部の練習でしょう。来月、コンサートがあるから。

千代

サトルと仲のいい子の名前を覚えてくださいって言ったら、心当たりがない
ってさ。あの子は教室で、いつも一人ぼっちだったそうさ。

アキラ

あいつは教室でも本を読んでいたよ。昼休みは、図書室で。
信濃川先生もそう言ってたよ。誰とも遊ぼうとしなかったって。でも、念の

千代

ために、何人か当たってみるってさ。
で、その返事は？

新発田

まだ来ない。きつと空振りだったんだろう。

新発田

そうとは限りませんよ。電話をお借りしていいですか？ 聞いてみます。
こっちだよ。

アキラ・新発田が去る。

千代

（日出子に）旦那の家には、電話したのかい？
三回もしたわよ。でも、来てないって。サトルに何かあったら、おまえのせ

日出子

いだって、怒鳴られた。

日出子

サトルくんは、おそらく兄と一緒にです。だから、危険な目に会う心配はない。
なぜそう言い切れるのよ。

智

兄はこの映画を、いや、あなたたちの人生を変えたいだけなんです。サトルくんを傷つける気は全くない。

そこへ、三条・なつきがやってくる。二人とも、紙袋を持っている。

三条

お邪魔します。

なつき

専務、サトルくんは？

一平

まだ見つからないんだ。でも、どうしてなつきちゃんまで？

なつき

三条さんに、おまえも来いって言われたんで。

千代

(三条に)で、店の方はどうだった？

三条

表も裏も、ちゃんと鍵がかかってました。中には入れなかったと思います。

千代

子供なら、窓から忍び込めるだろう。

なつき

ちゃんと中も見ました。隅から隅まで。でも、どこにもいませんでした。

一平

(日 outgoing に)いなくなってるから、もう三時間になるぞ。そろそろ、警察に届けた方がいいんじゃないですか？

智

それはやめてください。サトルくんは必ず帰ってきます。兄と一緒に。

日 outgoing

私もそうであってほしいと思ってる。でも、もし一緒にやなかったらどうするの？ サトルが一人でいなくなったらとしたら。

智

一人でどこに行くんです。

日 outgoing

わからない。わからないから、これだけ心配してるんじゃない。

そこへ、アキラ・新発田が戻ってくる。

アキラ 母さん、サトルがいたよ！

日 出 子 どこに？

新 発 田 学校だ。信濃川先生が見つけた。図書室で、本を読んでたつて。

日 出 子 よかった。無事だったのね。

智 新 発 田 に 兄 は 一 緒 で し た か ？

新 発 田 ええ。信濃川先生は怒ったらしい。すぐに家に帰りなさいって。でも、サト

日 出 子 ルくんは動かないそうです。僕はここにいます。

新 発 田 母さん、私、迎えに行ってくる。

日 出 子 僕も行くよ。

智 一 平 何してるんですか。行きますよ。(と走り出す)

一 平 誰がおまえに行けって言っただ。

智・日 出 子・新 発 田 が 去 る。

な つ き

千 代 よかったですね、無事で。

一 平 無事かどうかはまだわからないよ。会って、傷を確かめるまで。

千 代 傷って？

サトルは賢いからね。自分の言いたいことを、ずっと我慢してきたんだ。でも、あの子はまだ五年生だ。もう限界だったんだよ。

千 代・アキラ・一平・三条・なつきが去る。

佐 渡 島 今の場面は完全にオリジナルです。まるで、サトルが主役になったみたいだ。

春菜

サトルはずっと一人ぼっちだったんですよ。監督さんが、アキラを取っちゃったから。

佐渡島

そうか。サトルは、アキラと喧嘩もできなかつたんですね。ずっと本を読んでたんです。お父さんの本を。

五月二十五日夕。図書室。サトルがやってくる。本を持っている。後を追って、明がやってくる。

明
サトル

『坂の上の雲』の六巻か。まさか、その本が読みたくて、ここに来たのか？
……
諦めたのか？ お父さんから借りて読むのは。

明
サトル

……
もう家には帰れないと思ったのか？ お父さんには二度と会えないって。

明
サトル

父さんなんかどうでもいいんだよ。

明
サトル

どうでもいい？

明
サトル

俺は、俺のやりたいことをやる。そう決めたんだ。

明
サトル

それが、その本を読むことなのか？

明
サトル

……

明
サトル

でも、その本は、お父さんが大好きな本だ。本当は、お父さんに会いたいんだらう？

明
サトル

……

明
サトル

うるさい！

そこへ、智・日出子・新発田・信濃川がやってくる。智は冊子を持っている。

信濃川 日 出 子
サトル 日 出 子
サトル 日 出 子
サトル 日 出 子
新発田 信濃川
明智 明智
明智 明智
明智 明智
日 出 子
サトル 日 出 子
サトル 日 出 子
サトル 日 出 子

サトルくん、お母さんがいらっしやっただわよ。

サトル、どうして急にいなくなっちゃったの？ お母さん、心配したのよ。

家に帰ろう。おばあちゃんも一平も待ってるから。

ねえ、サトル。

サトルくんは一人になりたいんです。

兄さんは口を出すなよ。

おまえこそ、口を出すな。サトルくんは、今は誰とも口を聞きたくない。お

母さんにもお父さんにも会いたくないんだ。

それは、兄さんが仕向けたことだろう。

そうじゃない。サトルくんは自分でここに来た。俺が止めても、聞かなかつ

た。

サトルくん、本当か？

間違いないよ。その人は、何度も「帰ろう」って言ってました。でも、

サトルくんは耳を貸さなかった。

（サトルに）怒ってるの、私のこと？

新発田先生と映画を見に行ったから？ あんたを無理やり連れてってから？

それとも、お父さんを残して、家出したから？

それとも、お父さんを残して、家出したから？

それとも、お父さんを残して、家出したから？

それとも、お父さんを残して、家出したから？

日 出 子
サ ト ル
日 出 子
サ ト ル
日 出 子
サ ト ル
信 濃 川
サ ト ル
信 濃 川
サ ト ル
信 濃 川
サ ト ル
明
新 登 田
明
新 登 田
明
新 登 田
智

でも、それは、お父さんが悪いのよ。お父さんが勝手なことをするから。わかってるよ。

サトル。父さんは浮気したい。母さんは家出したい。それでいいじゃないか。みんな、やりたいことをやればいいんだ。僕はこの本が読みたい。だから、ここに来たんだ。この本が読み終わるまでは、帰らない。

サトル、あんた、何が言いたいのか？

言っただろう？ みんな、やりたいことをやればいいんだ。

あなたの気持ちはわかるわ。でも、お母さんのことも考えてあげて。お母さん

んは、家出したくてしたわけじゃない。あなたたちのためにを思っ——

僕はこの本が読みたい。

もう五時よ。そろそろ家に帰らないと。

(サトルに)本なら、家でも読めるだろう。その本は、借りて帰ればいい。

いいですよ、信濃川先生？

そうじゃない。サトルくんは、本なんかどうでもいいんだ。今すぐ、お父さん

んの家に帰りたいんだ。

お父さんの家に？

今日までずっと我慢してきたんだ。でも、あの映画を見て、やっぱり、お父

さんに会いたいと思っただ。そうだろう、サトルくん？

兄さんに、その子の気持ちかわかるのか？

わかるさ。俺は母さんに離婚してほしくなかった。家に帰ってほしかった。

だから、新登田先生と別れてから、言っただ。俺は反対だった。

それは兄さんの話だろう。でも、この子はアキラじゃない。サトルなんだ。

明 智

日出子

サトル

サトル

サトル

サトル

サトル

サトル

サトル

サトル

サトル

サトル

サトル

日出子がサトルを抱き締める。

佐渡島
智 春菜

おまえは、俺が間違ってるって言うのか？
この子は、この子の人生を生きるんだ。周りの人間が、勝手に決めつけるべきじゃない。
サトル、教えて。あなたは、お父さんの家に帰りたいの？
僕は。
僕は？
僕は。
言いたいことを言えばいい。君は自由だ。
自由じゃないよ。僕は絶対に自由になれないよ。大人になるまで。
サトル。
でも、もし自由になれるなら、僕は一人になりたい。お父さんもお母さんもない世界へ行きたい。
日出子さん、サトルくんを抱き締めて！
え？
お願い！ 早く！

まさか、聞こえたのか？
今のは、湯沢くんの声か？
先生、私にはサトルくんの気持ちわかります。周りの人間が、勝手に決めつけるべきじゃない。でも、わかるんです。ここで見てたから。ずっと見てたから。

智 春菜

君は何が言いたかったんだ。
サトルくんはいつもリビングにいました。誰かが帰ってくるたびに、お帰りがって言うてました。本を読みながら、いつも周りを気にしてたんです。誰か、自分に話しかけてくれる人はいないか。

智 春菜

そうだった。僕もそうだった。
大人には、自分の人生が選べます。でも、子供には選べない。自分一人の力では、幸せになれないんです。おもちゃが買ってもらえなくてもいいんです。旅行に行けなくてもいいんです。お父さんとお母さんが、自分の話を聞いてくれる。それだけで、子供は幸せになれるんです。

智 春菜

太陽？

智 日出子

そばにいて、光を投げかけてくれれば、それでいい。それだけで、子供は枯れずに済むんだ。
サトル、あんたの話聞かせて。お母さん、ちゃんと聞くから。何時間でも、あなたが話し終わるまで。

日出子・サトル・新発田・信濃川が去る。

智 明智

兄さん、湯沢くんの声が聞こえたかい？
ああ。おまえの知り合いか？

智 春菜

教え子だよ。彼女は今、兄さんの家で、この映画を見てるんだ。たぶん、見ながら、大声で叫んだんだと思う。そうだろう、湯沢くん？
すいませんでした。はしたない真似をして。

明 智 明 智 明 春 菜

いや、君の言ったことはすべて正しい。サトルを苦しめたのは、俺だ。俺がここに来なければ、サトルは一人にならなかつた。今頃、気づいても、遅いです。なぜ一人になりたいなんて言ったのかな。本当は、一人になりたくはないのに。サトルは、本当に本が読みたかつたんだ。読めば、忘れられるじゃないか。自分が一人だつてことを。映画を見るのも、そのためだろう？

智・明が去る。

そうだ。だから、俺は映画を作るんだ。だつたら、作れよ。新しい映画を。一人ぼっちの人のために。ああ。

二〇〇三年五月十五日夕。明のマンション。

佐渡島 よかった。これでやっとな帰ってきますね。

春菜 監督さんの容態、どうなんだろう。奥さん、病院に着きましたかね？

佐渡島 まだでしょう。着いたら、きつと電話をくれますよ。

春菜 次が、ラストシーンですよ？

佐渡島 そうです。千代の家に、病院から電話がかかってくるんです。でも、ここま

で来ると、全くの別の映画ですからね。どうなるか、わかりません。

一九八〇年五月二十五日夜。千代の家。日出子・サトル・新発田がやってくる。

日出子 ただいま。

そこへ、アキラ・一平がやってくる。

一平 サトル、おまえ、心配かけやがって。

新発田 一平くん、サトルくんを叱らないでくれ。悪気はなかったんだから。

一平 悪気がなくても、他人を傷つけることはある。そういう時は、素直に、ごめ

んなさいって言うんだ。さあ。

そこへ、千代がやってくる。

千代 一平、サトルに八つ当たりするんじゃないよ。

日出子 八つ当たりって？

千代 さつき、三条くんがなつきちゃんと一緒に来ただろう？ おかしいなと思っ

て聞いてみたら、一緒に暮らしてるんだってさ。

日出子 いつから？

千代 それが何と、昨日からだってさ。なつきちゃんはずっと前から、三条くんが

好きだったらしい。それで、うちの店を辞めたくなかったんだ。一平、春は

一平 おまえの横を通りすぎていったようだね。母さん、やっぱり、なつきちゃんはクビにしよう。で、別の子を雇うんだ。

そこへ、明・智がやってくる。

明 こんばんわ。

新発田 あれ？ あなたたち、帰ったんじゃないかなかったんですか？

明 帰る前に、ご挨拶をと思って。

千代 ついでに、パンを食べていかないかい？ 三条くんがクロワッサンの作り方

を調べてきてね。今、向こうで焼いてるんだ。もしうまくできたら、うちの

店を出してほしいってさ。

一平 俺は絶対に反対だ。ドイツパンの店がクロワッサンなんて。

智　　でも、結局、出すことになるんですよ。それで、ブリュンヒルデは潰れずに

済むんです。

俺、食べてみたい。

サトル　よし、行こう。

日出子・千代・アキラ・サトル・一平が去る。

新発田　村上さん、ありがとうございました。あなたのおかげで、長岡さんと映画に行くことができた。本当に感謝しています。

智　　でも、三回目の告白はまだしてないですよ？

新発田　ええ。今日はいろいろあったし、また今度にしようと思ってます。

明　　それがいい。その方が、あなたも傷つかずに済む。

新発田　どういうことですか？

明　　いや、これは言わない方が。

新発田　教えてください。僕は振られるんですか？

明　　今夜、日出子に電話がかかってくるんです。旦那さんが心臓の発作で倒れた

新発田　って。幸い大事には至りませんが、一カ月ほど入院することになる。旦那さ

新発田　んの愛人は、面倒を見ようとしな。それで、日出子さんは仕方なく、家に

新発田　帰るんです。

智　　嘘だ。僕は絶対に信じない。

新発田　でも、僕らの名字は、村上ですよ。新発田じゃなくて。

新発田　そう言えば、そうだ。なぜ最初に気づかなかったんだ。

そこへ、日出子がやってくる。

日出子 クロワツサン、焼き上がりましたよ。一緒に食べませんか。

明 日出子 いや、僕らはもう帰るんで。

智 日出子 そうですか。

智 日出子 日出子さん。ご迷惑をかけて、本当にすみませんでした。

智 日出子 私のこと、日出子とは認めないって言ってたのに。

智 日出子 それはもういいんです。あなたはやっぱり、サトルくんのお母さんだ。だと

智 日出子 すれば、やっぱり村上日出子さんなんです。

智 日出子 あなた方、本当にうちの親戚なんですか？

智 日出子 ええ。

日出子 私には信じられません。だって、あなた方の言ってることは無茶苦茶じゃない

日出子 いですか。ここは映画の中だとか、私があなた方のお母さんだとか。

新発田 わかった。本当のことを話すよ。そのかわり、約束してほしい。何を言っ

新発田 も、信じるって。

日出子 いいわよ。約束する。

新発田 じゃ、言うよ。この人たちは――

智 日出子 僕らは、未来から来たんです。今から、二十三年後の世界から。

智 日出子 冗談でしょう？

日出子 僕の名前は村上智。兄の名前は村上明。僕らは、あなたの息子なんです。

新発田 くん、この人たちが、私をからかっているんでしょう？

日出子 いや、本当だ。この人たちは、本当に君の息子なんだ。

日出子 嘘よ。

智

あなたは今、とても辛い時期にある。何よりも心配なのは、子供たちの将来だ。でも、安心してください。子供たちは立派に成長します。アキラは映画監督になります。何年も下積みをして、やっと自分の映画が撮れるようになるんです。そして、女優さんと結婚します。キレイで、優しい人です。

明

(日出子に) サトルは、二十三年後も独身です。でも、本をたくさん読んで、一生懸命勉強して、大学の助教授になります。専門はドイツ史です。サトルは一平さんが大好きだったから、ドイツ史を選んだんです。ドイツ語もペラペラです。

明智

(ドイツ語で) そうでもないよ。
(日出子に) 僕らは、今、とても幸せです。それは、あなたが僕らを大切に育ててくれたからです。この恩は一生、返せないと思っています。だから、僕は映画を撮ります。一人でも多くの人を幸せにするために。

春菜
智

先生、早くしないと時間が。
わかってる。兄さん、行こう。

そこへ、千代・アキラがやってくる。

千代

どうしたんだい？ クロワッサンが冷めちゃうよ。

新発田
千代

二人は、もう帰るんだそうです。
そうかい。じゃ、みんなでお見送りをしなくちゃね。アキラ、みんなを呼んでおいで。

アキラ

わかった。

アキラが走り去る。

明　　いいですよ、見送りなんて。

そこへ、信濃川がやってくる。

信濃川　　こんばんわ。

新発田　　わー、ビックリした。どうしたんですか、こんな時間に。

信濃川　　（智に）これ、図書室に忘れてましたよ。（と冊子を差し出す）

智　　（受け取って）シナリオか。まさか、読んでんですか？

信濃川　　ええ。私たちのこと、映画になるんですね。それならそうと、最初に言ってくればよかったのに。

そこへ、アキラ・サトル・一平・三条・なつきがやってくる。

一平　　何だよ、母さん。食事中に。

千代　　文句を言うんじゃないよ。お客さんが帰る時は、みんなでお見送りするのが

礼儀ってもんだらう？

一平　　やっど帰るのか。（智に）もう二度と顔を出すなよ。

智　　一平さん、あなたは気づいてましたか。ブリュンヒルデに、毎日、昼過ぎに

パンを買いに来る、婦警さんのこと。

一平　　ああ。志穂美悦子に似た、なかなかの美人だ。

智　　彼女の目的はパンじゃない。あなたなんです。

一平 そうなのか？ 何だよ、春はとっくに来てたんじゃないか。ありがとう。明

日、映画に誘ってみる。

さあ、先生。

兄さん、行こう。

ああ。

明 智 春菜

千代・アキラ・サトル・一平・三条・なつき・信濃川が口々に、「さよなら」を言う。

日出子

また来てくださいね。いつでも。待ってますから。
ありがとう、母さん。ありがとう、みんな。ありがとう。

明・智が歩き出す。太陽に背を向けて。